

星の金

Z32-B88

号月一十

第一十第

五

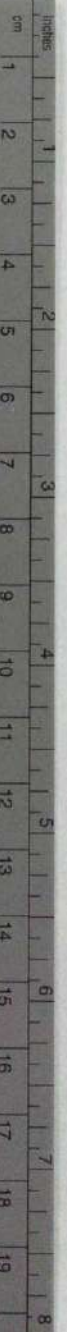


アピラヤンイナト号

国立国会

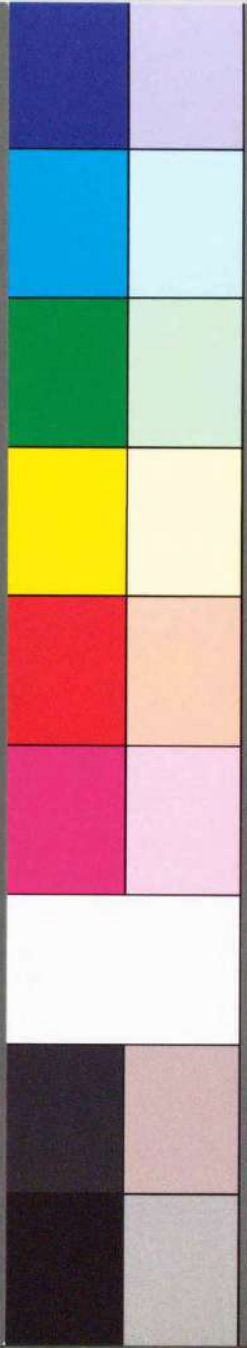
8. 3. 26

図書館



Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

C Y M

© Kodak, 2007 TM, Kodak

推 奨 兒 童 白 由 畫 集

原 色 版 (組一枚八) 集一第
繪 葉 書 (組一枚八) 集二第
錢拾貳金組一各 (共 料 送)
錢拾四金冊一 (付評選家大諸) 本合集二第集一第

本書集は弊社主催世界兒童畫展覽會開催に當り日本内地は勿論遠く朝鮮、滿洲、臺灣、樺太方面より應募された八萬五點の兒童作品と、選者たる山本鼎、岡田三郎助、白濱徹、小林萬吾、巖谷小波、平岡信敏の諸先生方が「兒童創作心の動機」と「整理の方面である技巧」とを綜合して選ばれたもの、中より特に其粹を抜いて艶麗なる原色版繪葉書とせるものである。最も進歩したクレイヨン畫の規準は大凡此の十六枚の小紙片に盡されてゐると云ふ可きである。兒童の眼に映じ感じたる儘の表現!! 自由にして純真なる小さきものゝ創作!! が如何に尊く偉大なるものであるかを味つて頂きたい。若しそれ教育家自身が之によりて啓發さるゝ結果の偉大なるものあるは勿論、之を各兒童に與へて鑑賞と自省との對照に供せらるゝ時、其處に驚くべき向上と進境とが見出さるゝであらう。

會商 ンヨイレク 京東 會社名 元造製 ンヨイレク 様王
番九三九七五京東座口替振 内之堀町鶴巢西外市京東

カルピス

うまいく 滋強飲料

どんなに病氣
かはマアても
坊やにカルピス
があれば安心
さ。



顧問 三宅誠一 理學博士
販賣店 酒造/食品/商店/藥店
總經銷 丸善/丸善堂/丸善株式會社
小堀、大堀、總用場 あり



目次

星夜の曲(表紙)……………落谷虹兒

大空へ(口吻)……………寺内萬治郎

眠り龜の子(童話)……………野口雨情

同作曲……………本居長世

田舎に來ぬか(童話)……………若山牧水

ドン・キホーテ繪物語……………水島爾保布

シンドバツドの航海……………小島政二郎

漁夫と惡魔……………秋庭俊彦



阿螺田と不思議なランプ……………山野虎市

アリババと四十人の泥棒……………三宅房子

ハンニバルの話(歴史物語)……………楠山正雄

牢破り(童話)……………西條八十

本所の雀(童話)……………落谷虹兒

(附 録)

長篇 鈍栗山(第九回)……………沖野岩三郎

通 信……………(101)・(102)・

讀者だより……………(103)・

新年號豫告……………





大空へ (口繪解説)

やがて夜があけると間もなく大鵬は羽根をひろげて飛び立ちました。こうしてずん／＼高く昇って行きました。しまひに私は地面も海も何にも見ることが出来ないほど高いところへ連れて行かれました。

(『シンドバットの航海』を御覧下さい。)

落谷虹兒先生作（ペン畫繪ハガキ）

本編は何人の追従をも許さぬ一
大傑作であつて大震災の歴史と
ともに永く後世に残るもの

キガハエ

震災畫報 第一輯

震災畫報 第二輯

題畫内容

- 生き残れる者の歎き
- 絶望
- 落日
- 落ちゆく人々の群
- 戒嚴令
- 焼野の月
- 人焼く煙
- 住家なき人々

銅印色二版凸刷ドークトーフ上最來船
錢十二金組一枚四價定

この二編の繪ハガキは、現代版界の重鎮、落谷虹兒畫伯が、天破れ大地ゆるぐ大震災の中に、踏みとどまり
猛火の包圍中にあつて苦心慘憺心血を注ぎ、削り上げられた、血と涙の大傑作であります。
この二編の繪ハガキに發表された、八枚の版畫は、實に、純情なる愛の涙から生れたもののみであつて、美に
して聖なるものの最高權威であります、何人と言へど、此れを涙なしで、見る事が出来ませうか。注文殺到で
す、品切れとならぬうちに、申込みあつて、乞ふ此の際の紀念とされよ。

神田神保町の本所は、此の度
の大震災で丸焼けになりまし
たから、假事務所の方へ御申
し込み願ひます。

申込所

東京市外千駄ヶ谷町七〇七
上方屋平和堂假事務所

振替東京七五一二番

第六號 十一月一日發賣

少年兒童文學

每行發部數八萬冊
一月一回發行

各部十五頁
定價各十錢

高尚、純美、廉價なる子供雜誌

▼惡戰苦闘、定價は依然として一冊十錢で繼續します
▼兒童文學は尋三四年用。少年文學は尋五六年用に御用ひ下さい
▼定價の關係から一切地方書店への取次販賣はいたしません。御手数ですが直接申し込んで下さい。代金は當分郵便爲替に願ひます
▼この際新しく會員の御申込を希望いたします。なるべく各十部以上の御注文をお願いします。

建國以來の
大震災にも
休刊せず

理想的な國語教授の補充教材

▼各地からの皆様の厚き御見舞を深く感謝いたします
▼御同情に勇氣づけられ捲土重來の意氣を以て益々闘ひます
▼本誌は今古東西の大文學を紹介するために生れました讀物です
▼食ふ如く讀むあの子供達にウント讀まして下さい、願ひします

東京市牛込區山伏町一四 兒童文學研究會 申込所

この大震災中に生れ出たため

最新刊二名著名

藝術教育

松原 寬著 教育問題叢書 第四篇 (忽再版)

目次
第一章 藝術研究の方法
第二章 藝術の科學的研究
第三章 藝術の哲學的研究
第四章 藝術の本質
第五章 藝術教育論

藝術は人生の花である。造詣深き著者の藝術教育論を吾が學界に捧ぐ

野口 雨情著 教育問題叢書 第五篇 (忽再版)

童話と兒童の教育

四版六二頁
定價一圓十五錢
送料八錢

目次
一 童話の使命
二 童話の正風とは何か
三 童話とは如何なるものか
四 童話とは如何なるものか
五 童話とは如何なるものか
六 童話とは如何なるものか
七 童話とは如何なるものか
八 童話とは如何なるものか
九 童話とは如何なるものか
十 童話とは如何なるものか

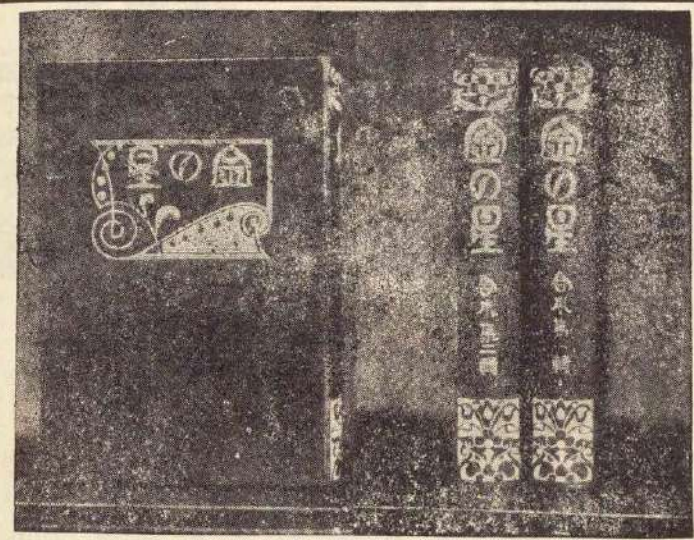
童話論は子供の世界に於ける唯一の宗教である。童話教育の創始者たる雨情氏の童話教育論を我が教育界に捧ぐ。

◆ 版出院書了デイ ◆

第二アラビヤン・ナイト號



星の金
號 月 一 十



美しい『金の星』の合本
第二輯が出来ました!!

▽水島爾保布先生装幀△

總クローズへ麗しい金箔を置いたそれはく美しい装幀ですから皆様の書棚にお飾りになつたら、どんなに見事でせう。そしてこれが幾冊にもなつたら、一段と皆様のお書齋を美しくする事です。買切れません内至急に御申込み下さい。

- 第一輯 (再版中) 定價金一圓八十錢 送料十圓
- 第二輯 (第五卷一號まで) 定價金一圓八十錢 送料十圓

東京市外 振替東京五九五六番 電話小石川三五八七番
金の星社 一五三番

眠り籠の子

本居長世作曲

Andante M.M. ♩ = 126

ねむれ ねむれ くびだした
 ねむれ ねむれ あしたした
 ねむれ ねむれ ねむたか

III

か - め の ...
 か - め の ...
 か - め の ...

か め の ... - か ね む つ た
 - - - - - - - - - - -
 - - - - - - - - - - -

か め の ... - - - - - か ね む つ た
 - - - - - - - - - - - - - - -
 - - - - - - - - - - -

II

眠り龜の子 (遊技童謡)

野口雨情

眠れ 眠れ
首出した
龜の子
龜の子が
眠った
眠れ 眠れ
足出した



Terauchi

龜の子
龜の子が
眠った
眠れ 眠れ
眠ったか
龜の子
眠った
龜の子が



五

田舎に來ぬか

若山牧水

お家焼かれた東京の

子供よ子供よみな來ぬか

田舎は静かだお日和だ

密柑も熟れた菊咲いた

お家焼かれた東京の



仲間よ仲間よみな來ぬか

田舎は静かだお日和だ

密柑も熟れた菊咲いた

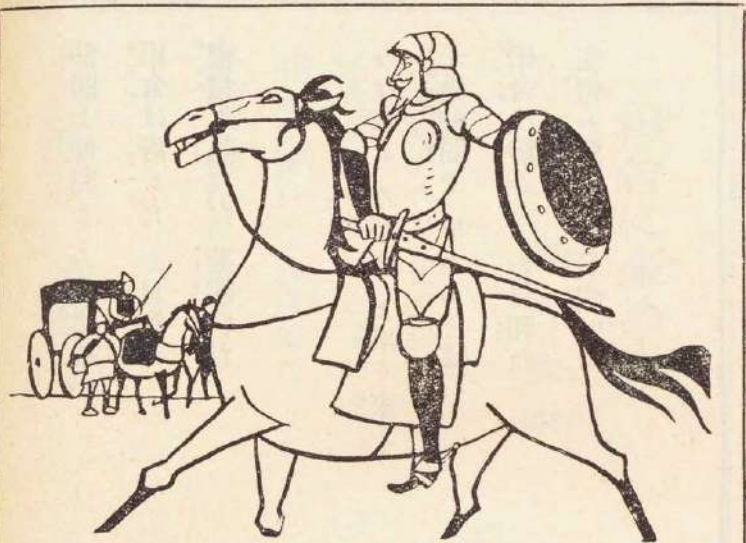
みな來よみな來よ早く來よ

子供仲間よ早よあそぼ

田舎は静かだお日和だ

密柑も熟れた菊咲いた





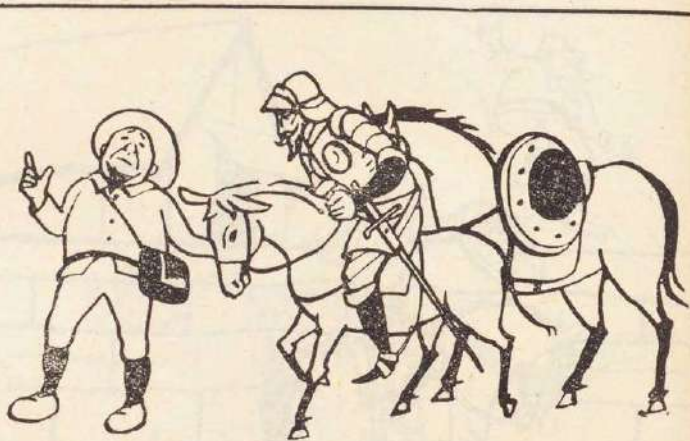
ドン・キホーテ繪物語

水島爾保布

十三

ドン・キホーテは風車の悪魔のために思はぬ不覺をとつた上に、大切の武器まで奪なにしてしまいました。幸に自分にもまた愛馬のロシナンテにも別段の怪我もなかつたので、その夜はある林の中であかし、尙も旅をつけて行きますと、ある街道の途中で、旅の貴婦人の馬車と出あひました。

ドン・キホーテは、その旅行者の中に、二人の坊さんの交つてゐるのを見て、妖怪が貴婦人をかどわかして行くのだといつて、その一行を往來でくひ止めようとしたので、又してもその下男達を怒らせ、指圖の結果、片耳と甲の鉢を半切り取られて了りました。



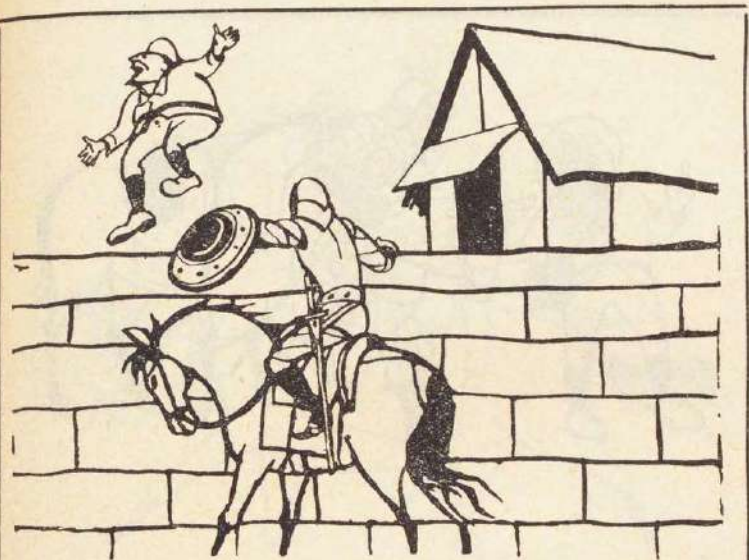
十四

しかしその職は、貴婦人の仲裁でドン・キホーテの勝利といふことになりましたが、そのあくる日は、とある小川の邊の草原で、大勢の馬方と喧嘩をして、主従二人、その乗馬もともに、その日の暮れ方迄は、立つことも動くことも出来ない程、打ちのめされて了りました。

それでもサンチョ・パンザの方は、いくらか元氣恢復が早かつたので、主人を助け起して驢馬の上に龜の子這ひに乗せ、ロシナンテを自分の馬のガツアルにつないで、びっこ引き引き、一軒の宿屋へたどりつきました。

しかし、ドン・キホーテは、苦しい中でも、その宿屋を城廓だと主殿し、さうしてその亭主やおかみさんを、城主だの奥方だのといつて、禮儀正しい挨拶をすることを忘れませんでした。

さてあくる朝出立しようとする、その城の主は旅籠賃と馬の飼料との勘定を下さいといひました。ドン・キホーテは武者修行が宿賃を拂ふ作法はないといつて、ロシナンテを急がせてどん／＼出て行つて了りました。



十五

宿屋の亭主はあとに残つてゐたサンチョ・パンサをつかまへて宿
 賃の催促をしましたが、サンチョも亦船様さへ支拂けないものを下
 郎が仕拂ふなんて事はないといつて、その儘グツアルをせき立てま
 したので、
 『主人といひ下男といひ、何といふ圖々しい奴等だらう。押はねと
 いふならかうしてやる。』
 といつて、消り合せた大勢の男達に加勢を頼んで、サンチョを
 馬から引ずりおろし、毛布の中へ入れて、ワツシヨ、ワツシヨと脚
 上げ九しました。
 ドン・キホーテは大勢の騒ぎ聲にまちつて、サンチョの悲鳴が聞
 えたので急いで引返しましたが、表の戸口は閉められて、堀の上か
 ら時々櫓のやうにリンチヨの體が弾み上るのが見えました。直様馬
 の背を踏んで堀を乗り越さうとしましたが、まだ昨日打たれた節々
 が痛むので、思ふやうな働さが出来ませんでした。

十六



やつとの事で許るされて、ヘトヘトになつて出て来たサンチョに、
 ドン・キホーテは、
 『あの家は城でもなく宿屋でもない。某の見附けたところではたし
 かに化物屋敷である。何よりの證據は某がその方の災難を助けよう
 とした時、何うしたのか手足がしびれて、堀に上ることも、また
 馬から下りる事も出来なくなつて了つた。』と懇め顔に云つてきかせ
 ました。サンチョは殿様の辯解には耳もかきす、いろ／＼と恨みが
 ましい愚痴をならべながら歩いて行きますと、やがて廣い野原に
 出ました。
 すると遙向ふから大きな砂煙が立って、見る間に近づいて来まし
 た。と又後の方からも同じやうな砂煙が濛々と立あがりました。ド
 ン・キホーテは素破こそがアマント大王とフリファンフアロン大王
 と合戦が始まる。果は同じ信仰をもつがアマント大王の味方をし
 なければならぬと、馬を飛ばして一方の砂煙の中へ駆け込んで行
 きました。ところがその大軍は、羊飼ひが深山の羊を追つて来るので
 ありません。けれどもドン・キホーテは更に朝敵なくロシナンテを
 駆け廻らせたので、到頭その羊を七匹迄も踏み殺して了ひました。
 羊飼達は非常に腹を立て、尙もたけり狂ふドン・キホーテにさかんに
 石を投げつけましたので、流石の騎士も前歯を四枚も折られ、さ
 うして遂に馬から落ちて氣絶して了ひました。(前篇をばり)

海航のドツバドンシ

郎二政島小



一 發端

昔、バグダッドの町に、ヒンドバッドといふ人足がゐりました。或暑い日、おもひ荷物を、町のはじからはじまで持つてゆくことを命じられました。ところが、また道のりの半分もゆかないうちに、ぐた／＼に疲れてしまつたので、或大きなお屋敷のかげに荷をおろして休みました。

がまきちらしてあつて、何ともいへない涼しい風が吹いて來ました。ヒンドバッドは、これはいいところで休んだと思つて喜びました。

すると、そのお屋敷の開いた窓から、伽羅や沈香の匂が流れ出て來ました。耳をすますと、お屋敷の奥の方から、音樂の音がもれて來ます。その音にまじつて、鶯や雲雀やその外たくさんの小鳥の聲も聞えて來ます。いや、そればかりではありません。おいしさうなお料理の匂までにはつて來ます。ヒンドバッドは、はゝあ、これは宴會をしてゐるのだな、とその時はじめて氣がつかしました。それにしても、一たい何といふ人のお屋敷だらうと考へました。この町へはまだ一度も來たことがないので、こんな立派な御殿があつたことさへ知らないのです。で、思ひ切つて段々をあがつて、ピカ／＼光る服をきた門番に聞いて見ました。すると、門番は「お前はバグダッドの町に住んでゐながら、こゝの

お屋敷に住んでいらつしやる方を知らないのかい？あの有名な船乗りの、太陽の照つてゐる海ならどこへだつて入らつしや、ないところははないといふあの大旅行家の、シンドバッドさまのお住ひをお前は知らないのかい？」と、あべこべに聞かれました。

さう云はれて見ると、ヒンドバッドも、シンドバッドの名やその富についてはたび／＼聞いて知つてゐました。が、今、その實際を見て、あまりに相手の仕合せな身分と、自分の哀れな有様とのちがひやうが激しいので、思はず嫉ましくなりました。で、彼は天を仰ぎ、拳で胸をうちながら「神さま！ シンドバッドと私との生活の違いやうを考へてください。私は毎日いゝんな苦しみと不幸となやまされてゐます。家族をやしなふために、非常に骨のをれる仕事をしてゐます。それで得るものはまづい大麥製のパンです。それにひきかへて、このシンドバッドは、お金を湯水のやうに使つてゐ

ます。そしてこんなに廣い屋敷に住んでゐます。一
たい、シンドバッドはどんなことをしたのです。何
のむくいでこんな幸福な生活がおくれるのです？
私はどんな悪いことをしました？ 何のむくい
で、



「私はこんな不幸な目にあふのでせう。」
かう云つて、神さまを怨みながら、不幸のために
氣がくるつた人のやうに、地團太をふみました。

その時でした。御殿の中から、一人の召使が出て
来て、シンドバッドの二の腕をつかみました。そし
てかう云ひました。

「こちらへ来てください。主人のシンドバッドが逢
ひたいと申してをります。」

これを聞いたシンドバッドは非常に驚きました。
自分がふら／＼と云つた言葉が、シンドバッドの耳
にきこえて、彼をおこらせたに違ひないと思ひまし
た。で、今は、この荷物を持つてゆかなければなら
ない用があるからと云つてことわりました。すると、
召使が、何も心配することはない、あなたのために
きつといふことがあるに違ひないからと云つて無理
にすゝめたので、とう／＼シンドバッドは連れられ
て中へはひることになりました。

彼は廣い立派な部屋へ通されました。見ると、大
きな丸いテーブルのまはりには、大せいの紳士や淑
女が、きれいなお料理のお皿を前に並べて、すらり

と席についてゐました。一ばんの上席には、背のた
かい、威嚴のある、白い鬚をふさ／＼とはやした
上品な人が坐つてゐました。そのうしろには、大せ
いの召使が、彼の御用をまつて控へてゐました。そ
れが有名なシンドバッドでした。人足のシンドバッ
ドは、立派なあたりの有様に、ます／＼びつくりし

て、ふるへながら一同に挨拶をしました。すると、
シンドバッドはこれに答へた後、彼をすぐ自分の右
側の席につかせました。(これは非常に丁寧なもてな
しなのです。)そして手づからお料理を皿にとつてや
つたり、いゝ香のする葡萄酒をついでやつたりしま
した。

間もなく宴會がすんだ時に、シンドバッドはいか
にも親しげに彼の名前と職業とをたづねました。

「閣下、私はシンドバッドと申します。」かう彼が答
へると、わしは君がこゝへ来てくれたことを嬉しく
思ひます。ところで、君はさつき通りで何か云つて

みましたね。あれはたいどういふ意味なのです
か。」とシンドバッドが開きました。シンドバッドは、
さつき宴會がはじまる前に、あいてゐる窓のまへを
通つて、ふとシンドバッドの神に對する不平の聲を
耳にしたのでした。それで召使をやつて呼んでこさ
せたのでした。

かう聞かれた時、シンドバッドは、やつぱりシン
ドバッドは氣を悪くしてゐるのだと思ひました。で、
ドギマギしながら、うなだれてしまひました。

「閣下、私は正直に申します。實はあの時私は疲れ
て不機嫌になつてをりました。で、思はず慎しみの
ない言葉を申したので。どうかお許しください。」
すると、シンドバッドは

「いや／＼、わしは君の云つたことを咎めるのでは
ありません。わしは君の境遇を知つて同情してゐる
からなのです。たゞ、君はわしについて間違つたこと
を考へてゐるらしい。わしはそれを正してもらひた

いと思ふだけです。君はわしが何の骨をりもせず、危険な目にもあはずに、今日の富を得てかうして贅澤をしてゐると思つてゐるでせう。ところがそれは大間違ひです。わしは永い間、あらゆる仕事をし、死ぬやうな目に行く度もあつた後、やつと今日のこの幸福な境遇を築きあげたのです。」

こゝまでは重にヒンドバッド一人を相手に語つてゐましたが、その時、ヒンドバッドは顔を大せいのお客さんの方にむけて

『實際です、諸君！』と云ひました。『わしは非常な冒険をして、實に不思議な目にあつてゐます。それを聞いたから、富を得ようと思つて海に乗りだしてゆくどんな慾張りの人たちも、恐らく二の足をふんでやめてしまふでせう。今日は一つ、わしが四度航海した間に、海や陸で出あつた恐いことや不思議なことを、みんな話して見ませう。食後の話にはちやうどいゝかも知れません……』

かう云つてヒンドバッドは、おもに人足のヒンドバッドを相手にして次のやうに語り出しました。その前に、ヒンドバッドは、ヒンドバッドがお客さんからのまれた大きな荷物を、二三人の家來に命じて、届けるべきところへ届けさせることを忘れませんでした。

二 第一の航海

私は兩親から、かなり多くの財産をうけつぎました。その頃はまだ若くつて無考へだつたので、いゝんな楽しみに、そのお金を惜しげもなく使つてしまひました。しかし、ある時ふと、そんな風に無駄づかひしてゐると、お金に羽根がはえて飛んで行つてしまふぞといふことに気がつきました。同時に、歳をとつてからみじめな目にあはなければならぬとも考へました。で、いくらでも残つてゐるうちにどうにかしなければならぬと思つて、或日決心をし

て、家や道具をみんな賣つてしまひました。そして手にはひつただけのお金をもつて、海を航海して方々の港々で商賣をしてまはる商人の仲間入りをしました。私たちは、用意のしてあつた或一艘の船に乗りこんで、バルソラの港を船出しました。

まづ目ざしたのは、インドでした。帆をあげて走つてゐるうちに、やがて、左手にペルシャの海岸を望み、右手にアラビヤの海岸を眺めながら、ペルシャ灣まで辿りつきました。その間、初めのうちは、私は船のゆれるのに大へん惱まされました。しかし、ちき慣れて、後には、決して船に酔ふやうなことはなくなりました。しば／＼、われ／＼は、いろんな島へ船をつけて、品ものを賣つたり、取りかへこをしたりしました。ところが、或日、果物が一ぱいなつてゐる島へ上陸しました。上陸して見ると、方々に、きれいな泉が湧き出してゐて、船の上から眺めたよりも一層いゝ島であることを知りました。しか

し、人間の姿といふものをつひぞ見かけませんでした。家もありませんでした。みんなはいろんなことを話しながら、あつちへ行つたりこつちへ行つたりして、花をつんだり木の實をもいだりして遊んでゐました。その間、私は、一人群から離れて、木のかけにはひつて、船から持つて来た食べものをムシヤ／＼食べながら葡萄酒を飲んで、一人でいゝ心持になつてゐました。傍には、ちよろ／＼小河が流れてゐました。さうしてゐる間に、いつとはなしに、私はウト／＼居ねむりを始めました。

そのまゝ幾時間ぐらゐ私は眠りつゞけたのでせう、自分でもはつきり分りません。ふと目をさまして見ると、あたりには誰もゐませんでした。沖を見ると、船が消えてゐました。私は氣ちがひのやうになつて、大聲を張りあげながら、海岸まで走つて行つて見ました。見ると、風を一ぱいに孕んだ帆前船

が、遙か遠い水平線に、影を没しようとしてゐるところでした。

それを一目見たとき、私は、あゝあ、なまじ命儲けの夢などを見ずに、家で家族と一緒に平和に暮してゐればよかつたと思悔しました。しかし、今になつてそんなことを考へたところで、どうにもなりはしません。それよりも、勇氣を出して、どうにかしてこの島から逃れ出る工夫をした方がいゝと思つて、まづ海岸に生えてゐる一だん高い木によぢ昇つて、沖の方を眺めました。しかし、何もかも見えませんでした。で、今度は島の奥の方へ目を轉じて見ました。すると、遙か遠いところに、キラ／＼光る何か白い大きなものが見えました。しかし、遠くはあるし、あんまりキラ／＼光つてゐるので、それが何であるかはつきりは分りませんでした。分らないだけに、私は非常に好奇心を燃しました。

私は急いで木から滑りおりると、自分の食べ残し

た食物をみんな掻き集めて、急いでその方へ歩き出しました。傍へ行つて見ると、それは非常に大きな、背の高い球のやうに見えました。觸つて見ると、すべ／＼してゐる上に、大へん柔いものでした。見たところ、どこにも足をかけるところがないので、昇つて見ることは出来ませんでした。仕方がないので、私はぐる／＼まはりを廻つて見ました。しかし、どこにも穴一つ明いてゐませんでした。一まはりするの、五十歩ばかりかかりました。

と、その時まで、じり／＼照りつけてゐた太陽が、急にかげりました。真黒な雲が私の上に掩ひかぶさつて来たのかと思ひました。ところが、それは大きな／＼大鳥が羽根をのして私のすぐ上を飛んでゐるのでした。一目見たとき、私は、船乗どもが、いつぞや、大鵬といふ不思議な大鳥の噂をしてゐたのを思ひ出しました。して見ると、この白いビカ／＼光る丸いものは大鵬の卵に違ひないと思ひました。

やがて、大鵬はゆる／＼と舞ひさがつて来ましたが、しまひに、ビタリと卵の上へ羽根を休めました。親鳥が卵を暖めにおりて来たのでした。私も卵と一緒に羽根の下になつてしまひました。目の前に、



大きな木の幹のやうなものが一本ニヨキリと立つてゐるのを何だらうと思つて見ると、それは大鵬の片方の足でした。私は急いでその足へ體をしつかり結

びつけました。明日の朝になれば、大鵬はきつと飛び立つに違ひない、さうしてこの島を離れて、大陸へ自分をつれて行つてくれるに違ひない、さう私は考へたからでした。

やがて夜があげると間もなく、大鵬は羽根をひろげて飛び立ちました。さうしてすん／＼高く昇つて行きました。しまひに、私は地面も海も何にも見る事が出来ないほど高いところへ連れて行かれました。と思ふひまもなく、今度はすうと下へ舞ひさがり始めました。あまりの早さに、私は目がまはつて氣絶しさうになつたくらゐでした。

ふと氣がつくと、いつの間にか、大鵬は地面の上におりてゐました。私は急いで紐を解き放して、大地の上に降り立ちました。

私が地面におりたかおりに、大鵬はまた風を切つて飛び立ちました。大鵬は、そこに寝てゐた大蛇を見つけて、やにはに舞ひさがるのが早い、ぐ

さと鋭い爪を突きさしたのでした。そして、とんが
つた嘴をふるつて二三度蛇を攻撃したかと思ふと、
爪にひつつかんでビュウと舞ひ立つたのでした。さ
うして、見てゐる間に、遠くへ消えてしまひまし
た。私は、その時初めて、あたりを見まはしました。
ところが、驚いたことには、そこは深い／＼谷の底
でした。上を見ると、高い／＼山が雲の中に頭をか
くしてゐます。どつちを見ても、切つ断つたやうな
峻しい崖で、とても上へ出ることは出来さうにも見
えませんでした。それでも、どこかに道がないこと
はあるまいと思つて、私は夢中になつて探しまはり
ましたが、どこにもそんな道はありませんでした。
私はがっかりして、頭をうなだれた瞬間に、そこら
一ぱいにダイヤモンドが、蒔きちらしたやうに、キ
ラ／＼光つてゐるのを見出しました。そのうちの或
ものは、すばらしく大きなものでした。私は夢中に
になつて喜びました。

で、どうしても眠れませんでした。
やがて、明け方近くなるにつれて、その音がバツ
タリ聞えなくなりました。蛇め、洞穴へ歸つたな、
と思つて、私はホツと溜息をついて、外へ出て、ま
たあつちこつちと谷の中を歩きました。私は
ダイヤモンドを、石か何かを蹴ちらすやうに、亂暴
に踏みにじりながら歩きました。だつて、私のやう
な境遇におかれたものにとつて、ダイヤモンドが何
の値打がありませう。——とう／＼ぐた／＼に疲れ
て、私は或岩の上に這ひあがるや否や、トロ／＼と
まどろみました。が、眠つたかと思ふと、はつと驚
いて目がさめました。私の體の近くへ、ドサといふ
音を立て、何物か落ちて來たのでした。見る
と、それは大きな生の肉でした。思はず私がそれを
見つめてゐる暇に、向うの崖からも、こつちの崖か
らも、バタ／＼大きな生の肉が降つて來ました。
ふと、その時、私は船の中で聞いた話を思ひ出し

二〇
しかし、氣がついて見ると、そこにもこゝにも、
さつき大鵬がひつさらつて行つたやうの大蛇が、
五六匹もトグロを巻いてゐました。中で一ばん小さ
なのでも、象をらく／＼と呑むことが出来るくらゐ
ありました。たゞ幸ひなことには、晝の間は、岩と
岩との間に出來てゐる洞穴へかくれてゐて出て來な
い様子でした。そして、夜だけ獲物をあさりに出る
様子でした。それは、明かに大鵬がこはいからに違
ひないと私は思ひました。

一日中、私は谷をあつちへ行きこつちへ行きして
歩きました。やがてあたりが薄暗くなつた頃
には、小さな洞穴へもぐり込んで、入口に石をかさ
ねて、蛇のはひつて來られないやうに用心をしまし
た。そして、僅かばかり身につけてゐる食物をたべ
て飢ゑを凌ぎました。やがて横になりましたが、一
晩中、蛇があつちへ行きこつちへ行きする度に、さ
ら／＼、さら／＼、と氣味の悪い鱗の音が耳につい
ました。それは、おりて行くことも出來なければ上
ることゝ出來ないダイヤモンドの谷から、ダイヤモ
ンドを取る話でした。どうして取るかといふと、谷
の上に巢をくつてゐる鷲が子供を生んだ頭をねらつ
て、寶石商人たちは、生の肉を力一ぱい谷底めがけ
て放りこむのです。すると、高い／＼上から放られ
るので、肉に勢がついて、下へおちるまでには、す
ばらしい勢になつてゐます。で、ピシャツとダイヤ
モンドの上に落ちる拍子に、二つや三つのダイヤモ
ンドは、肉の中へささるに違ひありません。鷲はそ
んなことは知りませんから、やあ、いゝ肉があらア
と云つた調子で、喜んでそれをさらつて巢へもつて
行きます。巢には、お腹のへつた雛が待つてゐます。
ところが、抜け目のない商人たちは、先きまはり
して、巢の傍で待ちかまへてゐて、親鷲が巢に肉を
おくのを見るや否や、下から石を投げたり嘔鳴つた
りして鷲をおどかします。親鷲は驚いて、どこへか

飛んで行ってしまひます。そのあとの巢へのはつて行つて、肉についたダイヤモンドを持つてくるのです。——この話を聞いた時、私はいゝかげんな作り話だと思ひました。方々を旅してまはつて来た人が、故郷の人を楽しませるために、見て来たやうな嘘をつくのだと思つてゐました。ところが、それは嘘ではありませんでした。實際目のまへで行はれてゐるのです。

この時まで、私はこの谷底で自分は死ぬものと覺悟をきめてゐました。併し、今は勇氣を得ました。ここを逃れ出る方法をいろ／＼と工夫し始めました。

まづ私は、今まで食べものを入れてゐた皮の袋をからにして、それへいゝばい、なるだけ大きなダイヤモンドをよつて入れました。そしてしつかり帯へ結びつけました。それから、そこ／＼に落ちてゐる肉のうちで、ちやうどよささうな大きなのを選んで、



紐で私の背中にくりつけました。さうして地面へ顔をつけて、ピッタリ寝をべつて、鷲の來るのを待つてゐました。

すると、間もなく、大きな羽音が聞えて來ました。やがて羽根をうごかす度に、ばさ／＼と私の體に羽風が感ぜられるくらゐ、鷲は近くへ舞ひさがつて來ました。と思ふ暇もなく、私は宙へぶらさげられました。「しめたぞ。」私は喜びました。鷲は一文字に巢へ飛びかへつて、私を肉ごと巢の中へ落しました。

すると、運よく、肉のさらはれて行くのを寶石商の群が認めて、すぐ巢の下へ來て、喚いたりおどかしたりして、鷲を追ひちらしてくれました。しかし、巢の中に私のゐるのを見出した彼等は、口をそろへて、私のことを寶石盜坊だと罵りました。

私は靜かに、中でも一ばんムキになつて私に食つてかゝつて來た一人に向つて

「まあ、さうおこらずに、私のことも考へて下さい。かりに、私のかほりに、あなたがあの谷底に一人とり残されたとして、その時のあなたの煩悶を想像してごらん下さい。それを思へば、あなたはもつと私に親切であつてもいゝ筈です。ダイヤモンドがほしいのなら、こゝにこんなにあります。これをみんな分けてやうちやアありませんか。」

かう云ひながら、私は皮の袋の中から多くのダイヤモンドを出して見せました。すると、みんなは私のまはりに集まつて來て、今度は、しきりに私の冒險に驚いたり、谷底から助かつた方法を「うまい」と云つて褒めたりしたあげく、私をつれて彼等のラントへ案内してくれました。

其上で、私の拾つて來たダイヤモンドをいち／＼調べてゐましたが、やがて、

「私たちは、永年ダイヤモンドを商つてゐますが、まだこんなに大きな、そして、こんなに立派な美し

「ダイヤモンドを見た事がありません。」と云つて、みんなは目を丸くして驚きました。

いろ／＼話を聞いて見ますと、イナライの巢を見つけたものは、その巢へ驚がもつて来たダイヤモンドはすべてその人のものになるのだといふ事が分りました。で、私は、私がつれて来られた巢を受け持つてゐる寶石商に、

「この中から、欲しいと思ふだけ取つてください。」と云つて、ダイヤモンドの袋を渡しました。

ところが、その人は、たつた一つしか取りませんでした。しかも、それは一ばん大きいといふのでありませんでした。

私が、もつと取れと云つて勸めても、

「いえ、これで澤山です。これ一つで、私の財産が出来ます。お蔭で、もう明日から私は働かないでも食べて行かれます。」

と云つて、大へん喜んでゐました。

に萎れて枯れてしまふのでした。

同じ島で、私は犀といふ動物を見ました。象よりは少し小さく、水牛よりは少し大きな獣で、一尺八寸からある、堅い角を一本持つてゐました。その角には、一寸お縦に溝が通つてゐて、その上、人間の髪が白くあらはれてゐます。この犀は、よく象と喧嘩をします。その時、犀は一本の角で相手を突きさして、相手の體を頭の上にかつぎ上げ、相手の流す血をいばいに浴びて夢中になつて、力を出しきつてパツパツとそこへ倒れてしまひます。そこへ大鵬があらはれて、象と犀とを一しよに鋭い爪にひつかけて、自分の巢へ飛んで行きます。こんな話をすると、あなた方は、嘘ではないかと疑はれるかも知れませんが、もし嘘だと思つたら、ボハ島へ行つてごらん下さい。——私はまだこの島でいろんな珍らしいものを見ましたが、あんまり長くなるから話すのはやめておきます。

四五日、私は彼等のテントの中へ泊めてもらひました。

やがて、寶石商人たちがそこを出發するとき、私も頼んで一しよに連れて行つてもらひました。彼等は、蛇のうじや／＼ゐる高い山をいくつも越えて、故郷へ歸るのでした。運よく、私たちは蛇に苦しまされもせずに、或海岸へ出る事が出来ました。そこから、船をたててボハといふ島へわたりました。そこには、大きな樟腦の木がたくさん生えてゐました。

たゞ大きいと云つただけでは、どのくらゐ大きいのか分りませんが、雨でもふつた時などには、一時に百人ぐらゐの人数が、木の蔭で雨やみすることが出来るくらゐ大きいのでした。樟腦の液をとるには、高いところに疵をつけて、下に樽を供へておけば、その中へ澤山の液がしたゝり落ちて来るのでした。そしてすつかり液を出しきると、木はひとりです。

とにかく、私はこの島で、ダイヤモンドを一つ出して、この國の物産と取りかへこをしました。そしてそれを持つてこの島を出發しました。故郷へかへる道々、それ等の名産を賣りはらつて、私はたくさんのお金を儲けをしました。

しまひに、私はバルソラの港へつきました。そこから急いでバグダッドへ歸りましたが、私はすぐ、儲けて来たお金の大部分を、貧しい人たちに恵んでやりました。それから残りのお金で、地面を買つて立派な家を建てて、家族のもとと静かな幸福な日を送りました。

こゝまで語つて来たとき、シンドバッドは話をやめて一息つきました。そしてその席に控へてゐた音楽隊に命じて、音楽を奏せました。宴會はそのまゝ夕方まで續きました。

漁夫と悪魔

秋庭俊彦



前回の梗概。漁夫が献上した四色の魚が、いろ／＼不思議を現したので、王様は驚いて、漁夫が道案内にして山へ行つてこらんなると、成る程これまで見たこともない池があつて、その中に四色の魚が泳いでゐました。王様はいよいよ不思議に思つて、池の堤に天幕を張つて、假屋をお作りになりました。

一、黒島の若い王様

夜になると、王様は假舎へおはひりになり、侍従をお呼びになつて、

「わしは氣がかりで、ちつとしてをれない。こゝに

んでした。王様は、歩くのに都合のいい服をおつけになり、劍をお下げになつて、陣屋の寝しづまるのを待つてから、たゞ一人でお出かけになりました。そしてわけもなく丘の一つを越して、どん／＼坂を下つてゆきました。野原へ出ると、夜の明けるまで歩きつゞけました。する中に、ずつと向ふのはうに、一つの大きな建物のあるが見えました。王様は喜びいさんで、あすこでいろ／＼様子をきいて見ようと、どん／＼近づいておいでになりました。それは宮殿がお城か、なにしろ立派な堅固な構へでありました。外側は黒く上塗りした大理石で出来てゐて、屋根は硝子のやうにすべ／＼した、見事な鋼鐵でふいてありました。王様は、はやくもこんな不思議なところへ出て来たことをお喜びになりながら、お城の前に立ちどまつて、ちつと様子ぞうかとひましました。門には二つの扉があつて、片方があいてゐましたから、さん／＼はひつて行くことは出来ましたが、

こんな池が出来たことや、わしの部屋に黒ん坊が姿をあらはしたことや、魚がものを云つたことや、何もかもわしにはあんまり不思議で、どうしてもそのわけをさぐり出さずにはゐられなくなつた。それで、わしは、わし一人でさぐりに行つて見る事に決心したから、お前はわしの出て行つたことを、外のものに隠してゐてもらひたい。」とおつしやいました。侍従は、いろ／＼に云つて、王様の企をおやめにさせようとしたが、王様はおき／＼になりませ

王様は、それでも叩いてみる方がい／＼と思ひました。そこで、初めそつと叩いて、ちよつとの間待ちました。が、誰も出てきませんので、きこえなかつたのか知らと、今度は大きくとん／＼叩いて見ました。それでも誰れも出てきませんので、なん度もなん度も叩きました。が、やつぱり誰ひとり返事をするものもないので、王様はあつげにとられてしまひました。こんな立派なお城に、誰ひとり住んでゐないことは、とても考へられないからです。

「誰もゐないのなら、かまはずにはひつて見よう。もし誰かにとがめられたら、そのわけを云へばいい。」と王様は思ひました。

門をはひつて、正面の入口へ来ると、王様は、「わたしは通りかゝりの旅のものです。ちよつと休ませて頂きに来たんですが、どなたもゐらつしやらないんですか。」と大きな聲でおつしやいました。やつぱり何の答へもありません。あんまりしんと

してゐるので、王様は、ます／＼不思議に思ひながら、ひろ／＼とした中庭へはひつて、誰れか人の姿が見えないかと、あたりの様子をながめました。

中庭にも人影が見えませんでした。王様は、絹の帷張のさがつた、広い玄關の部屋へはひつて見ました。床の間や長椅子は、メツカ織の布で張つてあり、いくつもの出入り口には、金糸銀糸を織りませた印度の織物が下げてありました。王様はそこからまた、立派な中庭へ出ました。その中央には、四隅に金の獅子のついた大きな泉水があつて、四つの獅子の口から吐き出されてゐる水は、泉水のおもてにダイヤモンドの噴水器は、アラビヤ風に塗つてある圓屋根の近くまで水を噴きあげてをりました。

お城の三方は、花園になつてをりました。花床や、泉水や、樹立や、そのほかさまざまなものがあるばかりでなく、たくさんの小鳥が、樂しさうにさへす

つて、その花園をいつさう美しく思はせました。

小鳥たちは、樹の上や宮殿の庇に巣がつくつてあるので、園からはかへ出て行くやうなことはありませんでした。王様は、部屋から部屋へと歩きまはりながら、どこもかもが素晴らしく立派なことを知りました。そのうちに歩きつかれて來ましたので、花園を見わたす部屋の一つに腰をおろして、いま／＼に見たありさまをいろいろと考へてごらんになりました。と、その時、ふいに、もの悲しい叫び聲が耳にはひりました。ちつと耳をすまして聽いてみると、『おゝ、運命の神さま、もうこの上わたしを苦めないで下さい。この苦しみを逃れるために、わたしを死なして下さい。これはど長い間苦んで來ましたのに、わたしはまだ生きてゐなければならぬのでせうか。』とその叫び聲は云つてをりました。

王様は、この可哀相な言葉に心をひかれて、その聲のする方へ行つて見ました。大廣間の扉口へ出て、色の魚の住んでゐる池のことをわたしに話して下さい。それから次に、このお城のことや、あなたがたつた一人で、こゝにゐらつしやるわけを聞かせて下さい。』と王様はおつしやいました。

若者は、この問ひに答へるかはりに、痛々しく泣き出しながら、

『運命と云ふものは、何と云ふやすすいものでせう。運命は、初めわたしを世の中へ出して、仕合せにさせてくれましたのに、今度はわたしを慘めに押し倒して、おもしろがつてゐるのです。』と、云ひました。

王様は、この上なく哀れに思ひながら、その不幸のわけを話してくれるやうにと云ひました。

『わたしはたゞ歎き悲んで、絶えず涙をながしてゐるほかに、どうすることも出来ないのです。』と若者は答へました。

そして若者は上服をまくりあげて、王様に見せま

そこを開きますと、部屋のなかには、一人の若者がをりました。若者は、きれいな服を着し、床からすこし高くなつてゐる玉座のうへに腰かけてをりました。その顔には、ひどく悲しさうな色が浮んでをりました。王様がそばへ近づいて、ぢろ／＼その様子を眺めますと、若者の方でも、王様をぢろ／＼眺めてをりましたが、やがて、低くおちぎをしながら、

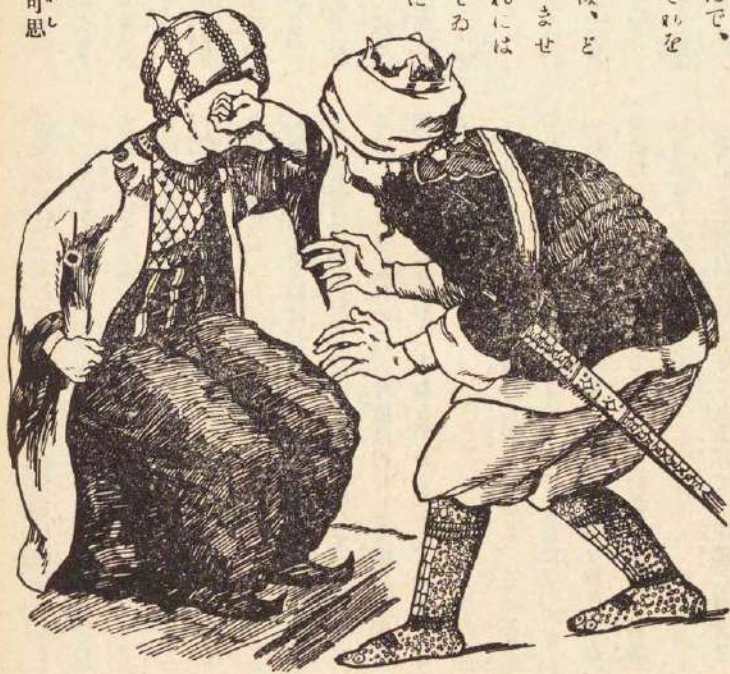
『あなたは身分の高いお方にちがひありません。わたしは立つてご挨拶しなければなりません。或る悲しいわけがありまして、立ちあがることが出来ないのでです。どうぞ悪くお思ひにならないで下さい。』と云ひました。

『いや、そんなことはお氣にかけられないが宜しい。わたしはあなたの悲しいお言葉をきいて、あなたをその苦みから助けてあげたいと思つて來たのです。わたしはあなたの不幸のわけをお聞きたいと思ひますが、まづ最初に、この宮殿の近くにある、四

した。この若者は頭から腰までは人間のからだで、腰から下は黒い大理石だったのです。王様はそれを見るとき、びつくりしてしまひました。

『あなたのこの恐ろしい姿を見ては、わたしは、どうしてもあなたの身の上を聞かすにはゐられませぬ。これは何といふ不思議なことです。これにはあの池と四色の魚が、きつと何か因縁をもつてゐるにちがひないと思ひます。どうぞ、わたしにあなたの身の上を聞かして下さい。不仕合せな人と云ふものは、自分の不幸を人に話すと、すこしは氣晴らしになるものです。』

と王様はおつしやいました。
『その話は、わたしの悲みを新しくするやうなものですけれど、でも、あなたにすつかりお話ししたませう。たゞ、よく氣をおちつけて聞いてください。わたしの話は、想像することも出来ないほど、奇妙不可思議



議なんですから。』

かう云つて、若者は話しはじめました。

『わたしの父親は、この國の王様だったのです。ここは「黒島」と云ふ國でした。この名前は、四つの小さい丘からとつたもので、その丘は、昔は島だったのです。今、あの池のあるところに、わたしの父親の王様の住んでゐた都があつたのです。』

『わたしの父親の王様は七十の年に死にました。わたしは王妃を迎へると間もなく、父の王位をつぎました。わたしが王妃を迎へた王女は、わたしの従妹でした。それから五年の間は、それは、仲よく暮らしました。ところが、五年目の末に、わたしは、王妃がもう、わたしを愛してゐないことを知つたのです。』

『或る日、食事のあとで、わたしはひと眠りしたく奪りましたので、寢臺の上へ横になりました。王妃の侍女が二人はひつて来て、暑さと蠅とをはらふた

めに、團扇を手にして、ひとりわたし頭のほうに、ひとりわたし足のほうに、坐りました。侍女は、わたしがすぐ眠つてしまつたものと思ひこんで、小聲で話をしはじめました。ところが、わたしは、目をつぶつてゐただけで、二人の話をすつかり聞いてゐたのです。』

『あんなおきれいな王様をお愛しにならないなんて、王妃様はわるい方ではありませんか。』と一人の侍女は云ひました。

『わたしには、どう云ふわけだかわかりませぬわ。王様はそれをご存じないんですか。』

『もう一人の侍女は云ひました。
『王妃様は、毎晩王様のお飲みになるものへ、何か毒草の汁をいれて、王様におあげになるんですもの。王様はぐつすりお眠りになつて、王妃様がどこかへいらつしやることを、ちつともお氣づきにならないんです。王妃様は、歸つていらしつてから嗅薬をあ

げて、王様をお起しになるんです。』
『わたしはこの話を聞いて、どんなに驚いたでせう。
わたしは胸がどきどきしましたが、ちつと我慢して、
眠ったふりをしてみました。』



三二
「そこへ王妃がはひつて来ました。そして、わたし
がきまつて一杯のむことにしてゐる水のコップをわ
たしにわたしました。わたしは、それへ口をつけず
に開けはなしてある窓のそばへ行つて、王妃に氣づ
かれないやうに、すばやく水をすてしまひました、
そして王妃にコップをかへして、すつかり飲んでし
まつたやうに見せかけました。暫くすると、わたし
は目をさましてゐましたが、王妃は、わたしが眠つ
てゐるものと思つて、こつそり立ちあがりながら。
『わたしは歸つて来るまで、ぐつすり眠つてゐるや
うに。』とはつきり聲を出して云ひました。

『王妃が部屋を出てゆきますと、わたしは、いそい
で起きあがつて、劍をとるが早い、王妃のあとを
追ひました。と、すぐに、王妃の足音が前の方にき
こえましたので、わたしは、さくられないやうに、
そつとあとをつけました。王妃は、いくつかの門を
通りぬけてゆきました。王妃が何か呪文をとるへる



と、ひとりでに門があきました。一ばんおしまひに、
王妃は、花園の門をはひりました。わたしは見つか
らないやうに、そこに立ちどまつて、薄闇のなかに
目をくばりながら、王妃が、厚い桐のしてある林の

なかの小徑へはひつて行つたのを知りました。わた
しは別の小徑から、桐のうしろ側へしのび寄つて、
王妃が、誰かひとりの男といつしよに歩いてゐるの
を見つけました。わたしは耳をすまして、王妃の云
ふことを聞いてゐました。

『わたしは、どんなことでも、お前の云ふ通りにす
るよ。わたしは、一と晩のうちに、このきれいな宮
殿も、この大きな都も、狼や梟や鴉のほかには何に
も住まないやうな、おそろしい荒野に變へて見せる。
こんなにしつかり築いてある塀の石を、外國の山の
向ふまで運んでしまへと云へば、すぐ、その通りに
して見せるよ。』王妃は云ひました。

小徑のはづれへ出ると、王妃とその男は、ほかの
徑へまがらうとして、わたしの前を通りかへりまし
た。わたしは前から劍を抜いて待つてゐたので、そ
の男が近づくと、首を目がけて、さつと切りつけま
した。その男は地面へ倒れました。(つづく)



阿螺田と

不思議なランプ

山野虎市

三四

さて、三ヶ月目に、阿螺田のお母さんは、御殿へ出かけ、王様にお目にかゝつて、約束の通り、お姫さまを阿螺田のお嫁さんに呉れるやうに願ひました。

「よし、私は約束を守りませう。併し、私の姫をお嫁に貰ひたければ、金で拵へた四十の盤に寶玉を一杯盛りあげて、四十人の黒人の奴隸と、四十人の白人の奴隸に、それを運ばせて持つてお出でなさい。」かう王様は申しました。これを聞きましたお母さ

んは困つてしまひましたが、家に歸つて阿螺田にその通り話しました。

併し、阿螺田は、

「お母さん、心配するに及びませんよ。」といつて、例のランプを取り出して来て、擦りますと、お化が現はれました。で阿螺田は、お化に向つて、寶玉の一杯入つた四十の盤と、四十人づゝの黒人と白人の奴隸を用意するやうに吩咐しました。

さて、寶玉を盛つた盤を頭の上に乗せた四十人の黒人と、それに付き添ふてゐる四十人の白人の奴隸の行列が町を練つて通りました時、都の人は皆な外に出て、驚ろいてその行列を眺めました。

纏て、行列が御殿に着き、寶玉が王様の前に捧げられました時、王様は驚きと喜びのために頭がぼつとなり、

「早く歸つて、お前の息子を連れて来てください。私は今日、お前の息子と姫を結婚させる。」と、附いて来た阿螺田のお母さんに申しました。

阿螺田のお母さんは急いで、家に歸り、一刻も早く御殿へ行くやうにと阿螺田に申しました。併し、阿螺田は、お母さんの吩咐には従はないで、先づ例のお化を呼び、香水の入つたお湯に連れて行かせ、そこで身體をすつかり洗ひ清め、王様の着るやうな金糸の入つた衣裳を造らせて、それを着ました。それから自分に従つて来る家來を四十八と、母に付き

添ふ家來を六人と、王様よりも立派な馬を一四と、十の袋に入れた金貨一萬圓を造らせました。

用意がすつかり出来上ると、阿螺田は、馬に跨がり、四十人の家來を後に従へて、都の大路を練りながら、御殿をさして進みました。

この行列を路傍に、堤のやうに群がって見てゐる人々に向つて、阿螺田は袋から金貨を掴み出して、餅を投げるやうに撒いてやりました。

人々は喜びの聲をあげて、先きを争つて金貨を拾ひましたが、誰れも阿螺田を毎日街で悪戯をしてゐたあの怠け者の仕立屋の子とは夢にも知りませんでした。皆なは、外國の偉い王子様に違ひないと思つてをりました。

かうして、威儀堂々と御殿に着いた阿螺田を見た王様は、いきなり阿螺田に抱き付いてお喜びになりました。そして今晚にも、結婚の式を挙げ度いと申しました。

三五



「それはいけません。王様のお姫さまの住居らしい立派な御殿を拵へた上で、婚禮をいたしませう。」
かう阿螺田はいつて家に歸りました。そして不思議なランプを擦つて、お化を呼び、

「大理石と、碧玉と、その外いろいろの寶玉で、今まで見た事もない立派な御殿を造つてくれ。そしてその御殿の真中に、四方の壁が金と銀で出来た二十四の窓の着いた大廣間を拵へるのだ。そして窓は皆、ダイヤモンドと紅玉で飾るのだが、一つの窓だけは何も飾らないで置いてくれ。無論、馬を入れて置く厩と、御殿で私に仕へる役人も拵へてくれ。」
朝起きて、阿螺田が外を見ますと、どうです！
自分の眼の前に世界中何所を探がしてもないやうな立派な御殿が立つてゐて、その大理石の壁が朝の光で、美しく輝き、窓からは寶玉の光が、金銀の雨のやうに光つてゐるのです！
阿螺田とお母さんは王様の御殿に參り、その日無

した。

寶玉商は、職人と一緒に長い間かくつて、自分の持つてゐる寶玉をすっかり使ひましたけれども、寶玉が足らなくて、窓の半分も飾りつけることが出来ませんでした。そこで王様は、御自分の寶玉を皆な持ち出して、工事をさせました。けれども矢張り寶玉が足りませんでした。

そこで阿螺田は、職人共に仕事をやめて、王様に皆な、寶玉を返へすやうに申しつけました。

その夜、阿螺田はランプの奴隸のお化を呼んで、その一つの窓を寶玉で飾るやうに吩咐けました。

この仕事が一晩の間に出来上りましたから、王様も職人共も吃驚してしまひました。

阿螺田は、かうして、王様のお姫さまをお嫁にして、立派な御殿に住むやうになりましたけれども、少しも意張りませんでした。阿螺田はどんな人にも優しく言葉をかけ、貧しい人にも親切でありました

事に、お姫さまと婚禮をいたしましたがお姫さまも阿螺田を愛しました。その日、都中の人々はこの婚禮をお祝ひして、一日仕事を休みました。

婚禮の次の日、阿螺田は、王様を自分の新しい御殿にお招きしましたが、大廣間の金銀の壁と、窓飾りの寶玉を見ました王様は、驚ろきと喜びに聲をあげました。

「これは世界に二つとない御殿だ。この世が始まつて以來、こんな立派な建物はなかつたらう。が窓が一つだけ、飾つてないのは、どうした理由だらう？」
かう、王様は訊ねますと、阿螺田は、

「陛下、あれは故意とあゝして置いたので御座います。私は、陛下が、あの窓を一つだけお飾り下さるやうにお願ひいたしましたので御座います。」と答へました。

そこでお出入の寶玉商が呼び出されて、残つてゐる一つの窓に、飾りをつけるやうに吩咐けられま

から、國中の人々は皆な阿螺田を尊とび、敬ひました。

話變りまして、遠くアフリカに逃げて行つたかの魔法使は、折角、骨折つてやつた仕事が無事にならぬ、不思議なランプを手に入れることが出来なかつたので、毎日、面白くなく暮してゐましたが、魔術の粉を燃やして占つて見ますと、地面のなかへ閉ぢ込められて、とつくに死んだ筈の阿螺田が、無事に生きてゐる許りでなく、立派な御殿の中で、王様のお姫さまと暮らしてゐることが分りました。

「阿螺田の奴、ランプの呪法を知つたに違ひない。俺は奴からランプを取り返へすまでは、夜も眠らないぞ。」
かう、魔法使はいつて、怒つて、自分の頭の毛を引き奪りました。

そこで、魔法使は、支那に向つて旅立ちをいたし

町へ出て行つた召使は、直ぐに歸つて来て、お腹を抱へて笑ひながら、
「不思議な老人が、新しいランプと古いランプを取り換へると呶鳴つて歩いてゐるので御座います。今まで、そんな商賣人が來なかつたもので御座いますから、人が騒いでゐるので御座います。」と申しました。お姫さまもお笑ひになりましたが、棚の上の隅の方に乗つてゐる古いランプを指さして、
「あそこに随分古いランプがあるが、あれを新しいのと取り換へさせてはどうかね。」と申しました。
召使は古いランプを持つて、もう一度、外に出ました。

魔法使のランプ屋さんは、召使の持つて來たランプを見て、これこそ不思議なランプに違ひないと思つて、兩手でそのランプを受け取りながら、
「どうか、どれでも好いのお取り下さい。」といつて、さら／＼光る新しいランプを澤山見せました。

まして、阿螺田の住んでゐる都へとやつて参りましたが、思つたより立派な阿螺田の御殿を見て、齒がみをして、腹を立てました。

併し、魔法使は、直ぐに商人と化け込み、銅のランプを澤山買ひ込んで、

「古いランプと、新しいランプの取り換へ！ランプのお取り換へ！」と大聲で呶鳴りながら、町から町へと歩き廻りました。

都の人々は、今まで、こんな變つた商賣人を見た事がありませんでしたから、このランプ屋さんの周圍に集つて来て、罵つたり、笑つたり、騒いだりしました。

さて、或日、阿螺田が、獵をしに行つて留守の間、お姫さまはたつた一人、御殿の奥座敷に坐つてゐましたが、俄かに町の方が騒かしくなつたので、召使を呼んで町に何事が起つたのか見届けて來るやうに申しつけました。

古いランプを受け取ると、ランプ屋さんはあたふたと何所かへ姿を隠してしまひました。

都の外の静かな所へ出ると、魔法使は人のゐないのを見計らつて、お姫さまから取り換へて來たランプをそつと擦りました。すると、お化が現はれて、
「何御用ですか。」と訊ねました。

「阿螺田の御殿と、お姫さまと一緒に、アフリカの淋しい所へ運んで行つてくれ！」

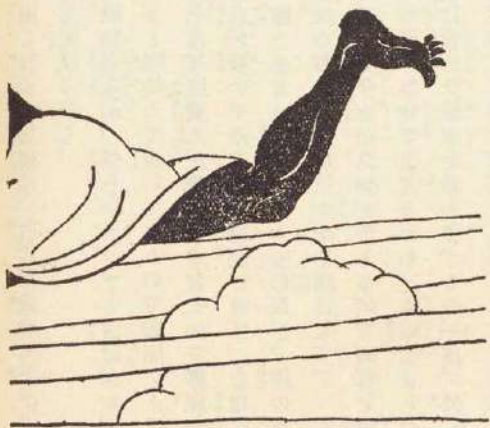
かういひますと、今まで立派に立つてゐた御殿が雲のやうに消えてなくなりました。

王様は、ふと、自分の御殿の窓から外を眺めましたが、阿螺田の御殿が、すつかり跡方もなく無くなつてゐたので吃驚してしまひました。

「魔術にかゝつたのだ！」

かう王様は叫びまして、早速家來共を呼んで、阿螺田を鎖で縛つて來るやうに命令をいたしました。

阿螺田を縛りに行った家来共は、獵から歸つて來る阿螺田に出逢ひましたので、直ぐに阿螺田を鎖で縛り上げて王様の御殿へと引つ張つて參りました。併し、途中で、都の人々が、阿螺田の後へそろそろついて來て、阿螺田の身に災難が降りかゝらぬやう



にと祈りました。

阿螺田は縛られて王様の前に引き据ゑられました。が、王様はこれを見まして、火のやうになつて怒り、直ぐに阿螺田の頸を刎ねるやうに吩咐けました。併し、その中に部の人民共が、御殿の周圍に集つて來まして、王様を脅して騒ぎ立てましたから、王様は自分の思ふ通り阿螺田の頸を刎ねる事が出来なかつた許りでなく、人民共が益々猛り出しましたから、たうとう、仕方なく阿螺田の鎖の繩を解いてやりました。

阿螺田は鎖を解かれて、ものをいふ事を許るされました時、何故自分は縛られたのかと、王様に訊ねました。王様は、

「この悪漢！ あれを見よ。」と申しまして、阿螺田を窓の所へ連れて行き、阿螺田の御殿が立つて居つた場所を見せました。そして、

「御殿がなくなつたのは仕方がない。併し、私の娘

目には姫を取り返へすことが出来ねば、私の頸を刎ねて下さい。」

かういつて阿螺田は、王様の許可を受けまして外に出ました。

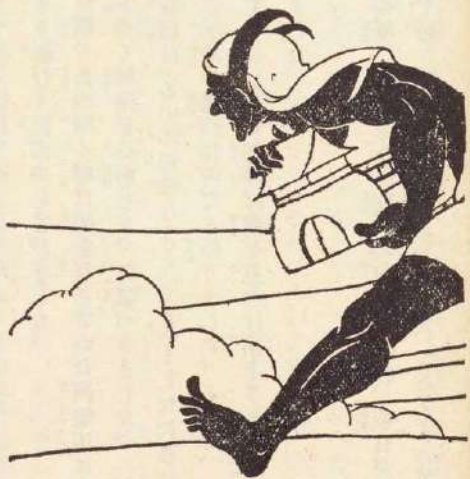
御殿を出た阿螺田は、三日の間彼方此方と歩き廻つて、狂人のやうに逢ふ人毎に、御殿が何所へ行つたのかと訊ねましたが、誰れも知つて居る筈がありませんでした。

すつかり弱つてしまつた阿螺田は、河へ行つて身を投げて死なうといたしました。併し身を投げる前に阿螺田は河の堤に坐つて、手を組んでお祈りをして、今一度指にはめてゐる指輪を擦りました。すると指輪のお化が現はれて、

「御主人、何か御用ですか。」と訊ねました。

「私の妻と、御殿を取り返へしてくれ」と阿螺田がいひますと、

「それは私には出来ません。あの不思議なランプの



は何所へ行つたのだ？」といひました。

阿螺田は魂が脱けたやうに、御殿の在つた場所を見詰めながら、暫時は言葉もなく、呆れてつ立つてゐました。

「陛下、一ヶ月の間、どうか御暇を下さい。一ヶ月

奴隷だけが、貴郎の御殿とお姫さまを取り返へすことが出来ます。」

「それでは、御殿の立つてゐる所へ私を連れて行って、妻のゐる窓の下へ私を置いてくれ。」

かういふや否や、阿螺田はもうアフリカへ行つて、自分の御殿の窓の下に立つてゐました。併し、阿螺田はすつかり疲れてゐましたから、その場に倒れてぐつすり眠り込んでしまひました。

次の朝、鳥の啼く聲に眼を覺された阿螺田は、起き上つて周囲を見廻して、元氣づきました。

阿螺田は、あの不思議なランプを失くしたために、今度の不幸が起つたのだと悟りました。そして、どうしてもランプを盗んだ奴を見つけ出さうと決心いたしました。

その朝、お姫さまは床から出ましたが、朝日が美しく照り輝き、鳥が樂しそうに啼いてゐますので、

こで今夜、魔法使が夕飯を食べる時、貴女は一番よい衣裳をつけて、立派に着飾つて、なるべく優しく、親切に見せかけなさい。そしてアフリカの酒を持つて来るやうに吩咐しておやり。そして魔法使が酒を取りに行つた間に、私は貴女によい方法を話しますから。」

その晩、魔法使がお姫さまの室へ這入つて来た時に、お姫さまは目も眩むばかりに着飾つて、そして、昨日まで泣いてばかりゐたお姫さまが、大變優しく言葉をかけましたので、魔法使はすつかり酔つたやうな氣持ちになつてしまひました。

「阿螺田はもう、死んでしまつたに違ひありません。ですから私はもう、泣いたり悲しんだりいたしません。今夜は、御祝ひにお酒を飲みませう。併し、私はもう支那のお酒に飽きましたから、アフリカのお酒を持つて来てください。」

窓を開けて外を見ました。と窓の下に阿螺田が立つてゐるのです！

お姫さまは嬉れしさの餘り、駆け降りて行つて、素早く阿螺田を戸の中に入れました。

二人は暫時は、ものもいへませんでした。

「あの棚の隅に置いてあつたランプをどうしたのです？」と、暫時たつてから阿螺田は訊ねました。

「どうも濟まないことをいたしました。こんどのことは皆な私の不注意から起つたことで御座います。」

お姫さまはさういつて、年とつた魔法使がランプ屋と化けて、都に入つて来て、たうとうあの古いランプと新しいランプを取り換へられた一部始終を話しました上、

「魔法使は今もランプを外套の中に隠して、何時も肌身を離さないで持つてゐるのです。」と、申しました。

「私共は、ランプを取り返へさねばなりません。そ

かう、お姫さまは言葉巧くみに申しました。さうしてゐる間に、次の室で、阿螺田は毒藥の粉を用意して、魔法使がアフリカの酒を取りに行つた間に、その粉をお姫さまに渡し、魔法使に飲ませるやうに吩咐しました。

間もなく、魔法使が、アフリカの酒を持つて歸つて來ましたが、お體さまは仲直りの印だといつて、そつと粉を杯の中に入れて、酒をついで魔法使に飲ませました。

魔法使はぐつと一息に酒を飲みましたが、飲み終ると直ぐに、ばたりと倒れて死んでしまひました。

その時、阿螺田は次の室から出て来て、魔法使の外套を探がして、不思議なランプを取り出しました。そしてランプを擦りますと、例のお化が現はれました。阿螺田はお化に、御殿をもう一度支那へ運んで、もとの所へ置くやうに吩咐しました。

次の朝、王様は早く起きて、阿螺田の御殿の立つて居つた場所の方の窓を開けて眺めました。王様はお姫さまを失くした悲しみのため、毎晩眠れなかつたのです。



「夢ぢやないか知ら」と王様は眼を擦りながら叫びました。王様の驚いたのも無理ではありませぬ。阿螺田の御殿が、もとの通りぢやんとして、朝日の光を受けて、照り輝いてゐたのです！

王様は直ぐ、馬に乗つて御殿に出かけまして、阿螺田とお姫さまに抱き付きました。二人は王様にアフリカでのお話を詳しく話して、まだ死んでその儘になつてゐる魔法使の死骸を見せました。

さて、魔法使は、かうして、死んでしまひましたが、その弟に兄よりも性質の悪い魔法使がゐましたから、阿螺田は、それが何となく氣懸りでした。阿螺田の心配してゐました通り、兄が殺されたのが分かると、弟の魔法使は、阿螺田に復讐をした上で、不思議なランプを盗み出さうと決心して、アフリカから、支那に向つて出發いたしました。

魔法使が支那に着くと、方智妙といふ尼さんの庵へ、こつそりと忍び込み、法衣と頭巾を奪ひ取り、



その尼さんを殺してしまひました。魔法使は尼さんから奪つた法衣と頭巾を着込んで、巧く尼さんに化けて、阿螺田の御殿の方へ歩ん

で行きましたが、名高かい尼さんの方智妙さまがお通りになるといふので、都の人々は路に蹲んで、その贖の尼さんの法衣の裾に接吻をいたしました。

方智妙尼が町をお通りになると聞きましたお姫さまは、平常から、一度お逢ひしたいと思つてゐましたから、早速家來をお遣しになつて、方智妙さまを自分の御殿にお召しになりました、その贖の尼さんを生佛さまのやうにお迎へいたしました。

「立派な御殿では御座いませんか。」と二人が大廣間の窓際に坐つた時に、お姫さまが申しました。

「仰せの通り立派な御殿で御座います。併し、たつた一ツ足りない物が御座います。この大廣間にアラビヤの鷲の卵が垂れ下つてをれば、申し分がないので御座います。」かう尼さんが、頭巾で顔を隠しながら下を向いて申しました。

これを開きますと、お姫さまの顔色が悲しさに曇りました。そこへ入つて來た阿螺田は、直ぐにお

姫さまの顔を見て、一體どうしたのかと訊ねました。
「この大廣間にアラビヤの鷲の卵が垂れ下がるまで
は、私は不幸なので御座います。」とお姫様は申しま
した。

「それは何でもないことです。今に貴女は幸福にな
ります。」阿螺田が笑ひながら次の室に入つてラン
プを棚から下して、お化を呼びました。

併し、阿螺田の命令を聞いた時、お化は怒つて、
その眼は燃えてゐる石炭のやうに赤くなりました。
「私は、今まで貴郎に何でも、貴郎の思ふ通りの物
を上げました。それに今、貴郎は、私の主人を殺ろ
して、銃具のやうに大廣間の中央に懸けようとなさ
るのですか。貴郎がそんな悪者なら死んでもよい。
併し、貴郎も心から、そんな悪い事をしようとする
のでなく、尼さんの姿に化けた魔法使の煽動に乗つ
て、鷲の卵を取らうとするのです。」
かういつてお化は消えてしまひました。

阿螺田は直ぐに、お姫さまの室へ行つて、
「どうも頭が痛くて困る。どうか、あの尊い尼さん
を呼んで下さい。尼さんが手を頭に乘せてくれると、
痛みが直ぐに取れますから。」といひました。

そこで、賈の尼さんは勿體らしく、阿螺田に近寄
りましたが、阿螺田は不意に襲ひかゝつて、隠くし
て置いた短刀で、尼さんの胸を突刺しました。

「何をなさるのです！、貴郎は尊い尼さまを殺すの
ですか。」とお姫さまは驚いて、叫びました。

「いや、こ奴は尼さんではないのです。魔法使が、
私共二人を滅すために、姿を變へてやつて來たので
す。」阿螺田は答へました。

阿螺田にはもう、心配な事が少しもありませんで
した。阿螺田はお姫さまと二人で楽しい月日を送り
ましたが、お父さんの王様が亡くなられた後、阿螺
田は父王の位を繼いで王様となり、お姫さまは皇后
さまとなりました。(をばり)

アリババと

四十人の泥棒

三宅房子





ルシヤの

或る町に、むかし、二人の兄弟が住んでゐました。二人の名はカシムとアリババといひました。だが、お父さんが財産をのこして死んだので、二人でそれを同じに分けて暮すことになりました。所が、間もなく、兄のカシムの方はお金持ちの女と結婚しましたが、弟のアリババは貧乏な女と結婚しました。そこで、カシムはお大名のやうな暮しをして、何もせずにごろ／＼してゐましたが、アリババは暮しを立てるために激しい労働をしなければなりません。毎日アリババは森へ樹を伐りに行つて、それを三匹の馬にのせて、町へ賣りに行くのでした。

さて、ある日のこと、アリババが森の中にゐますと、遠くの方で、雲のやうに砂埃があがつてゐるのに気づきましたが、だん／＼近づくに従つて、それは大勢の人間が馬を走らせて來るのだといふことが

わかりました。

「あれは泥棒たちに違ひない。」

アリババはふるえながらいひました。

アリババは急いで馬をかくして、どんな事が起るか見たいと思つて、樹に昇りました。恰度その樹は、大きな岩の傍に立つてゐたのです。

泥棒の群は樹の下まで來ました。すると、一人一人馬からひよい／＼と飛び下りて、馬の鞍につけてある袋を下しはじめましたが、どの袋にも金貨がいっぱい入つてゐると見えて、ひどく重さうでした。

泥棒の隊長らしい男が岩の前までやつて來ました。そして大きな聲で、

「開け！ 胡麻よ！」といひました。

アリババは驚きました。岩の下にかくれて見えなかつた扉が、静かに開いて行くではありませんか。

泥棒たちはどん／＼中へ入つて行くのです。

しかし、泥棒たちはちぎりにまた出て來たので、隊

長は、

「閉ろ！ 胡麻よ！」と叫びました。

扉は忽ちに閉つてしまひました。そして、もう誰にも、こんな岩丈な岩の中に、入口があることなど分らなくなつてしまひました。

泥棒たちは馬に乗りました。そしてちぎりに行つてしまひました。アリババは、静かに樹から下りて來ました。今しがた聞いた言葉をまだ覚えてゐましたから、ためしに岩のところへ行つて、

「開け！ 胡麻よ！」といつて見ました。

すると、どうです。扉は静かに開いて行きました。全く今しがたと同じやうですから、アリババはそつと中へ入つて行きました。中は大きな洞穴になつてゐました。金目の品物や、金貨や銀貨の入つた大きな袋がいばい積んであるのです。それを集めるのに幾百年もかゝつたらうと思はれました。

アリババはよく注意をはらつて、金貨のいばい入



つた袋を六つより出しました。そして、それを馬の背に乗せて、外からは見えないやうに森で切つて来た木の枝でかくしてしまひました。

その後でアリババが「閉ろ！ 胡麻よ！」と叫ぶと、扉は音もなく閉つてしまひました。

さて、アリババが家へ着きますと、お神さんが金貨の入つた袋を見て、大層悲しうな顔をしました。

「あなた。：：あなたはまア泥棒に：：」とお神さんがいひかけましたので、アリババが「いゝや、私は泥棒ぢやない、成程それは實のところ盗んで来た物には違ひないが。」といつて、洞穴の中の出来事や、どうして金貨を採し出したか、その譯をお神さんに話しました。

お神さんはすつかり喜んで、アリババが袋からあげた金貨を勘定にかゝりました。しかし、アリババが、「おいゝ、そんな馬鹿な仕事はしてゐられない

らです。

大急ぎでアリババのお神さんは家へ歸つて来ました。そして、金貨を量つてしまふと、また秤を返しに行きましたが、秤の皿に塗つてあつた豚の油に、金貨が一つくつついてゐた事には氣がつかせませんでした。

カシムのお神さんは、金貨を見つけてびつくりして、

「一體、これはどうしたのだらう。あゝ、わかつた。アリババは金貨を勘定するほど金持ちになつたのだ。それで秤が入用になつたのだ。」と叫びました。

カシムは家へ歸つて来てこの話を聞くと、眞赤になつて怒つて、すぐと弟の家へ行きました。

「何んだつてお前は己を欺したのだ。己の神さんは、お前達が勘定のしきれない程澤山金貨を持つてゐることを見つけてしまつたぞ。この場でいへ、どうしてお前にそれが手に入つたか。」

よ。幾週間もかゝるぢやないか。はつとけゝ。それよりも庭に穴を掘つて、その中にかくさうぢやないか。」といひました。

「ですが、どの位あるか勘定して置いたら猶いゝぢやございせんか。私はこれから行つて、兄さんのカシムさんのところから秤を借りて參ります。さうすれば、あなたが穴を掘つてゐらつしやる間に、私は金貨を量つてしまひます。」と、お神さんが言ひ張りました。

そこでお神さんは兄さんのカシムの家へ行きましたが、恰度カシムが出かけて留守でしたから、カシムのお神さんに秤を貸してくれと頼みました。

「すぐに返して下さいよ。」とカシムのお神さんがいひました。しかし、カシムのお神さんは何故アリババが秤が入用なのか不思議に思ひましたので、秤の皿に豚の油を少しばかり塗つて置きました。さうして置けば、何を量つても、底へくつつくと思つたか

と、カシムは嘔吐しました。

アリババはすぐと、自分の秘密を見破られたことを知りましたから、兄さんに対する話の話をしました。そして、これだけは十分秘密をまらつてくれるやうにと頼みながら、例の不思議な呪文のことも教へてしまひました。

そこでカシムは家へ歸ると、急いで十二匹の驢馬をひつばつて、アリババから教つた洞穴を探しに出かけましたが、間もなく其處へ着きましたので、カシムは驢馬を外につないで、

「開け！ 胡麻よ！」と叫びますと、秘密の扉は忽ちに開きました。

ところが、カシムは大層慾の深い男でしたから、泥棒たちの寶物を見ると、もう嬉しくつてゝたまらなくなつて、思はず躍り出してしまひました。

カシムは一番大きな金貨の袋を十二より出して、それを戸口の方へズル／＼引ばつて行きまし



た。それから不思議な呪文を思出さうとしました
が、あんまり喜んでしまったので、頭がぼうとして
しまつて思出せなくなりました。そこで、

「開け！ 大麥よ！」と叫びました。

しかし、扉は閉つたまゝになつてゐました。カシムは胡麻も穀物の一種だから、大麥だつて同じだと考へたのです。ところが、いつまでたつても扉が開かないのですから、カシムは頭の中でいろいろな穀物の名を考へ出して唱へて見ましたが、どれもこれも役に立たないので、扉は一分も開きませんでした。

恰度その時に泥棒たちが馬を走らせてやつて來たのです。

隊長は「開け！ 胡麻よ！」と叫びました。そして、中へ入つて來ますと、今にも金貨の袋を運び出さうとしてゐるカシムのあるのを見つけたのです。泥棒たちは自分の秘密を探し出されたので、どん

なに怒つたことせう。

四十人の泥棒はカシムに飛びかゝつて、身體を八ッ裂きにしてしまひました。それから、其の死骸を洞穴の直ぐ目につくところへつるして、金貨を盗みに入つたものは此の通りだぞと、見せしめの積りで吊下げて置きました。

夜になりました。しかしカシムが歸つて來ないので、カシムのお神さんは心配して、アリババのところへ來ました。そして自分の夫がどうしたか見に行つてくれと頼みました。アリババは翌朝はやく、三匹の馬をひつばつて、泥棒の洞穴へ出かけて行きました。

「開け！ 胡麻よ！」とアリババは叫びました。そして扉が開くと、中へ入つて行きました。

あゝ、アリババが心配してゐた通りだったので、兄さんは泥棒に目つかまつて、身體を切れなく切られてしまつてゐたのです。

アリババは八ッ裂きになつた兄さんの死骸を下へ降ろして、それを丁寧に集めて二匹の馬に乗せました。それから、アリババはもう二匹のたくましい黒馬に、金貨の袋を二つ乗せました。

やがてアリババは山を下つて來ましたが、カシムの家へ來て戸をたたくと、モルギヤナといふ女の奴隷が出て來て戸を開けました。この奴隷は兄さんの家にある大勢の下僕の中で、一番利口で、よく役に立つ娘でした。

アリババはこの女奴隷を傍に呼んで、そつと話しました。

「お前の御主人は泥棒に殺されて、身體を八ッ裂きにされたのだよ。しかし、そんな事を誰にも知らせてはいけませんよ。で、このことを誰にも知らせずむやうな方法を考へて見ておくれ。」とアリババがいひました。アリババはモルギヤナが賢い女であることを知つてゐたからです。

それからアリババは家の奥へ入つて行つて、カシムのお神さんに悲しい出來事を話しました。

「悲しんではいけません。あなたは私の家へ來てお暮しなさい。私達の寶をあなたにも分けて差上げます。たゞ誰にも私達の秘密を知られないやうに、注意しなければいけませんよ。」と、アリババはいひました。

そこでアリババ達は切れぬになつたカシムの死骸を馬から下して、近處の人達にはカシムが夜の間に不意に死んだのだと告げました。

それから女奴隷のモルギヤナは、遠方に住んでゐる年とつた靴直しのところへ出かけて行つて、針と糸を持つて自分と一しよに來てくれと頼みに行きました。

「この仕事は秘密でお願ひしなければならぬのです。ですから、あなたを家へ案内するまで、目隠しをしなければならぬのです。」とモルギヤナはいひ

ました。

最初、年とつた靴直しはいやだといひましたが、モルギヤナが金貨を一枚靴直しの手に握らせたので、すつかり様子が變つてしまつて、目隠しをさせて、カシムの家へ行くことになりました。モルギヤナは家へ着くと、靴直しの爺さんに切れぬになつた主人の死骸を縫ひ合せてくれとたのみました。



靴直しは誰にも縫目の分らない程上手に縫合せました。そこで、モルギヤナはまた目隠しをして、靴直しを家へ連れて歸りました。

かうして秘密は誰にもわからずすんだと思ひましたので、アリババ夫婦はカシムの家へ行つてカシムのおかみさんと一しよに暮すことになりました。

さて、泥棒たちの方では、山の洞穴へ歸つて來て見ますと、死骸はなくなつてゐるし、その上金貨の袋がまた二つ同じやうになくなつてゐるので、ぶんぶん怒り出しました。

「誰か外にわれわれの秘密を知つてゐる奴があるのだ。すぐとこれから其奴を探し出さなければならぬ。」と泥棒たちは叫びました。

そこで相談の結果、泥棒の中の一人が變装して町へ行つて、山の洞穴で殺された男は一體何人であるか、それを探し出しに行かうといふことになりました。さうすれば、八裂きになつた死骸と、金貨の袋

を盗み出した男がわかると思つたからです。

ところが偶然にも、翌朝早く泥棒が町へ入つて行つた時に、一番早く見世を開けてゐた家が、カシムの身體を縫ひ合せた靴直しの家だつたのです。

「お早よう。よく御精が出ますね。しかし、こんなに早くつてはあなたの目には暗くつて仕事が出来ませんよ。」と、泥棒が聲をかけた。

「どうして／＼私の眼はまだもうろくはしないよ。何しろついで昨日なんぞは、切れ／＼になつてゐる人間の身體を縫ひ合せて、次ぎ目が誰にも分らない位にやれるのだからね。」と靴直しは自慢さうにいひました。



「本當かね、して、その人は誰だね。」と泥棒がききました。

「それは誰だか私にはいへない。何しろ私はその家へ目かくしをして連れて行かれて歸りも同じやうにして戻されて来たのだからね。」と靴直しが答へました。

すると、泥棒は靴直しの手金貨を一つ握らせました。そして、その家を教へてくれと頼みました。

「私もお前さんに目かくしをする。さうすればお前さんは昨日連れて行かれたと同じ道へ私を案内することが出来る筈だ。もし、その家を教へてくれれば、もつと澤山お金をあげる。」と泥棒がいひました。

そこでたうとう靴直しは承知をして、目隠しをされて、そろ／＼と歩いて行きましたが、遂にカシムの家のところまで来て立止りました。

「この家に違ひない。どうもそんな気がする。」と靴直しがいひました。

すると泥棒はポケットから白墨を出して、また来てでもわかるようにと、戸のところへ白く印しをつけました。そして、大喜びで森の中にある仲間のところへ歸つて行きました。

それから間もなく、女奴隷のモルギヤナは水を汲んで家の中へ入らうとした時、チラリと戸の上にかいてある不思議な印に氣づきました。

「これはきつと、うちの御主人に何か悪いことをしようとする目印に違ひない。」とモルギヤナは思ひました。

そこでモルギヤナは白墨のかけを持つて来て、町中のどこの家の戸にも同じ印をつけて置きました。

さて、森の中の泥棒たちの方では、仲間の者が、八つ裂にした男の家を探し出して来たといふので大喜びで、その男を道案内にしてすぐその晩の内に、行つて、戸に印をつけて来た家の者は一人残らず殺してしまはうと出かけたのです。ところが、いよいよ町へ行つて見ますと、何處の家にも同じやうな印がついてゐるではありませんか。さすがの泥棒たちも、開いた口がふさがりませんでした。

泥棒の隊長は眞赤になつて怒り出しました。

「何んてへまな仕事をしやがつたんだ。」と隊長は案内した男に向つて呶鳴りました。「貴様のやうな奴はもう生かしては置かないぞ。俺がこれから一人で行つて探して来る。」

そこで翌日、泥棒の隊長は自分で變装して年とつた靴直しのところへ行つて、またカシムの家へ行く道を案内してもらひました。しかし、泥棒の隊長は質い男でしたから、その家へ白墨で印なんぞをつけ



て来ませんでした。また来てよくわかるやうに、念を入れて家の様子を見て置いて、そのまゝ晩の仕事の仕度をしに戻つて行つたのです。

泥棒の隊長は先づ最初に、二十四匹の驢馬とそれから油をいれる大きな瓶を三十九買つて来ました。そして、その瓶の一つには油を一ぱいに入れ、外の空の瓶の中には泥棒を一人づゝ入れたのです。隊長は瓶を驢馬に乗せて、町へ向つて出かけて行きました。泥棒の隊長は晝間よく見て置いた家の前まで来て見ますと、恰度アリババが家の外に立つて、夕方の景色を眺めてゐました。

『今晚は』と泥棒の隊長は丁寧にお辭儀をしていひました。『今晚お宅へ泊めていたとけますまいか。それから私の油瓶をお宅のお庭に置かしていただくことが出来ませうか。私は油商人でして、遠方から参つた者でございます。』

『お入りなさい。お入りなさい。』とアリババは親切



にいつて、驢馬が庭に入れるやうに門を開けました。それからモルギヤナにあたくかい夕飯をお客さんにあげるやうにといひつけました。

さて、泥棒の隊長は手下の泥棒たちに、合圖として庭へ石を投げるから、さうしたらすぐと瓶の蓋をはねて、助けに出て来るやうにといひつけて置いたのです。ですから泥棒たちは、合圖のあるのを今か今かと、瓶の中で辛棒して待つてゐました。

ところが恰度その時に、モルギヤナは大いそがしをして夕飯の御料理をこしらへてゐましたが、ふいにランプが消えてしまつたので、途中でお料理を止めなければならなくなりました。その時家には、油がちつともありませんでした。

『さうだ、庭の瓶から少しばかり持つて来ればいゝのだ。』

モルギヤナはさう思つて、油商人の持つて来た瓶のところへ、ランプを持つて油を入れに行つたのです。ところが、モルギヤナが一番先の瓶のところまで行くと、

『もういゝのですか。』と小さな聲でいふのです。

『未だだよ』といつて、モルギヤナは次の瓶のところへ行きました。しかし、どの瓶からも同じやうなことをいつて訊くので、その度にモルギヤナは同じことをいつて答へましたが、たうとう最後の瓶のところまで来ると、この瓶には本當の油が入つてゐま

した。

「あゝ、大變な油商人が来たものだ、これは泥棒に來て、うちの御主人を殺すつもりなのだ。」とモルギヤナは思ひました。

そこでモルギヤナは、最後の瓶から油を汲んで來て、大きな鋼に一ぱいそれを入れて、火の上で煮立てました。

油はぐらぐらと煮立つて來ましたから、モルギヤナはそれを持って、泥棒のかくれ處へ上から注ぎ込んだら堪りません。泥棒たちは皆なうん／＼いつて、死んでしまひました。

泥棒の隊長は、恰度いゝ時刻だと思つて、石を庭に投げました。

ところが、一人も出て來ないのです。おかしいと思つて庭へ下りて行つて瓶の中を見ますと、一人残らず死んでしまつてゐます。隊長はびつくりして、命から逃げて行きました。

しくアリババに仕返しをしたいと思ふ心で一ぱいなので、何か外の計略を考へました。そこで泥棒の隊長は大商人のやうに見せかけて、アリババの息子が見世を聞いてゐる所へ直向かひに見世を開く事になりました。

このにせ大商人は大層な金持ちで、そして又大層なれ／＼しいものですから、アリババの息子はすつかり好きになつてしまつて、どうかして懇意になりたいと思つて、この商人をお父さんの家へ招待しました。

しかし、にせ商人は招待されて來ますと、アリババに向つて、

「私はあなたと御一緒に夕飯をいたさきたいのですが、どうもそれが出來さうもございません。私に決して鹽をたべないといふ誓をたてたのです。ですから、私の食物だけはどうぞ別におねがひいたしたうと、いひました。

翌朝モルギヤナは、アリババを庭へ案内して瓶を見せました。アリババは瓶の中に屍のあるのを見て膽をつぶしました。モルギヤナはつかりの話をして、瓶の中の泥棒たちは死んでゐるのだといふことを知らせました。

アリババはおそろしい危険からのがれたことを知つて、どんなに喜んだこととせう。またどんなに有難く思つたこととせう。

「もうお前は奴隷ではない。私はお前を自由の身にしてやる。またその他にも澤山お前にお禮をした。」

とアリババは、嬉しさのあまりモルギヤナにいひました。

さて、泥棒の隊長の方では、山の洞穴まで逃げ歸つて來ましたが、手下が一人もゐなくなつたのです。つかりしほげてしまつて、そこにもちつとしてゐられなくなりました。その上、彼は前よりも一層はげ

ございます。」

「そんなことはお易いことでございます。今晚の食物には鹽を入れないやうに申しつけます。」とアリババが答へました。

モルギヤナは主人からこの命令を聞いた時、これには何か不思議なわけがあるのではないかと思ひました。で、お血を運ぶ時に、よく注意してお客を見ました。

お客が泥棒の隊長であることを知つた時、モルギヤナのおどろきはどんなだつたでせう。しかも隊長は袖の下に短刀をかくしてゐることを知つたのです。またその時、

「悪者は、殺さうと思ふ人間と一しよには鹽を食べないものだ。」

といふことも思ひ出しました。

そこでモルギヤナは踊り子のやうな装をして、夕飯をはると手に短刀を持って、アリババとお客の



ハニルバの話し

楠山正雄

ローマのファビウスの軍を破つたハンニバルは、アドリアチック海に注いでゐるオファント河の流域に數ヶ月を過しました。夏になりますと、彼は更にカンネの町に入りました。この町はローマに取つてはこの地方での倉庫ともいふべき重要な場所でありました。

ローマでは何とかしてハンニバルの禍から脱れようとして一生懸命です。やがて又九萬の兵士からなる軍隊が編成されると、急いでカンネに向つて進みました。この時ハンニバル軍ではイスパニアから来た本隊は大部分戦死してゐて、現在の五萬の兵士は大半は信頼されないゴール人であつたのです。しかし彼はその中から、辛うじてヌミジア人を主とする一萬の騎兵を集めて、ローマ軍に當る主力を作ることが出来ま

前へ踊りに出て行きました。

モルギヤナは皆なが喜んでしまふ程上手に踊りました。

にせ商人は褒美にモルギヤナの持つてゐるタンポーン(手に持つて踊る太鼓)にお金を入れてやらうと思つてふところから金容れを出しました。ところが、モルギヤナは商人の方へタンポーンを差出しながら、別な手で短刀を出して、商人の胸を突き刺したのです。

「馬鹿者め！ 何んでお前は、お客様にそんな真似をするのだ。」

と、アリババが叫びました。

「私をあなたのお命を救つたのです。」とモルギヤナはいひました。

「こゝを御覽なさいまし。」といつて、モルギヤナは商人の袖にかくしてあつた短刀を見せました。さうして、商人といふのは本當は泥棒の隊長である事を

話しました。

アリババの驚きと喜びはどんなだつたでせう。アリババは夢中でモルギヤナを抱きました。

「お前は私の息子と結婚しておくれ。さうして私の娘になつておくれ。」

と、アリババは叫びました。

この後長い間、アリババは山の不思議な洞穴に行くことを恐れてゐましたが、一年たつてからもう一度行つて見ますと、泥棒たちの死んだ後は、何もかもそのまゝになつてゐることがわかりました。もう何にもこわいものはありませんでした。

そこで、アリババはその國で一番のお金持になりました。

「開け！ 胡麻よ！」

といふ不思議な言葉を唱へると、いつでも洞穴の秘密の扉は開きました。(をばり)

した。

ここにカルタゴ軍に取つて有利なことがありました。それはローマの執政官同志が激しく憎み合つてゐるといふことでした。一方のパウルスは才能もあり勇氣もある軍人でありましたが、人を支配することにかけては他の一人のヴァロと共に全く無能でありました。ローマでは又昔からおかしな習慣がありました。二人の執政官が同じ陣地にある場合には、一日交代に軍隊を指揮するといふのでした。そのために今の様な場合、ローマが敗北を招くのは當然な位です。

ハンニバルは例の通り、敵をちらさせ誘ひ寄せるために、河向うにヌミデア兵をやつて盛んに戦ひを挑みました。案の状ヴァロは怒り、翌日の戦ひは自分が指揮して見事カルタゴ軍を撃破して見せると叫びました。一方のパウルスはフアピウスの勸告に従つて其の不利な事を説きましたが、ヴァロの耳には

るのです。ローマ軍の若い兵士たちは、この有様を見て怒りに體を顫はせたこととせう。それからゴール人は大抵裸體で、彼等の持つてゐる劍はたゞ切ることが出来るばかりで突くことは出来ませんでした。イスパニア人は紫の縞のあるリンネルの胴着を着てゐました。それからバリアリツク群島から來てゐる兵士たちは投石器と弓を持つて先頭に立つてゐるのでした。

戦の初め、ハンニバルの戦線はヴァロの方法が誤つてゐたのにも拘らず、一度



六四
入らず、彼ほつひに、其命令を全軍に傳へさせました。

次の朝早くローマ軍は河を渡り始めました。數時間を費して上陸したローマ軍は、そこに僅かばかりの兵士を残し、大部分を率ゐて平野の中に進んで行きました。形勢は又もやハンニバルに取つて有利になつて來ました。

さて兩軍がいよいよ對ひ合つたとき、それは實に妙な對照でした。總勢みな甲冑をつけ劍と短い投槍を携へて整然としてゐるローマ軍にひきかへ、カルタゴ軍はたゞ雜然と集つた群衆としか見えないほどでした。異つた種族が皆鎧々の服装をし、種々の武器を持つてゐるのです。中にもリビアン人などは、一寸見ると、ローマ軍からの脱走兵のやうに見えました。

何度かの勝利に分捕つた敵の武器は勿論、その服装までも今は自分たちのものにして納りかへつてゐ

ローマ軍のために蹴破られました。しかし劇しい戦ひの後勝利は又もやカルタゴ軍の手に歸しました。ローマ軍は四萬も少ないカルタゴ軍のために追ひ散らされ、あまつさへ執政官のパウルスと前年迄執政官であつたサルピリウスとアチリウスとは戦死してしまひました。ヴァロ一人だけが逃げて行きました。

ローマではいよいよハンニバルが進軍して來ることを覺悟しました。今まで日和見をしてゐたも

のも、今は疑ひなくハンニバルに勝利のあることを悟り、イタリア半島の南半部及びカンパニアの多くの都市も彼と進退を共にしたいと思つて、マセドンのフィリッポは軍艦と軍勢を送ることを約束し、数千のゴール人は彼の陣營に集つて來ましたが、さてハンニバルが、眞實信頼することの出来る兵力では、到底ローマを包圍することは出来なかつたのです。

ハンニバルはローマに使者をやりました。そして捕虜のローマ人に對して賠償金を出させることに就いて交渉をしようとした。しかしその使者はローマの執政官に、その用向を聞いて貰ふことさへ出來ませんでした。

ハンニバルはどうしても本國から援兵を送つて貰ふ必要を感じ、弟のマグス・カネニウスを本國にやつて、執政官に戦に勝つた報告と、自分の要求とを傳へさせたのです。まことにこの時期こそ、カルタゴがハンニバルに防戦の地位に立つことになりました。それにもかかはらずローマ軍は、最早やみだりにハンニバルに向つて來ようとはしませんでした。ファビウスの方法にならつて、たゞハンニバル軍のあとを追うてゐるに過ぎませんでした。

三年は過ぎました。カルタゴではイスパニアを維持するために、その方へ軍隊を送ることになりました。そのために、イタリア半島では段々と又ローマの勢力が増して來て、ハンニバルは南へ南へと退却して行きました。

紀元前二百十三年頃、ハンニバルはタレントゥムでローマの艦隊に包圍されました。タレントゥム中の驚きは大變なものでした。しかしハンニバルは夜になつて、灣と外海との間の小さな岬を横切つて板をしきつめ、その板に油を塗り、其の上に牛皮を敷きました。そして封鎖されてゐたタレントゥムの艦隊を一つ一つその板の上に引き上げ、外海まで滑らせて

ルをしてローマを征め滅させるために援兵を送る絶好の時期であつたのです。ハンニバルはカンネの陣地に停つて、船の高い本國の船の姿の見えるのも、こゝ數週間を出でまいと信じきつてゐたのでした。彼はたゞ一途に國家を思ひ、國民を愛する心から、自分の希望は必らず容れられると考へたのでありました。ところが彼と共に國家を荷つて立つてゐる皆の自國の執政官たちが、彼の勝利を極度に嫉んでゐたといふ事については、少しも考へ及ばなかつたのでした。

絶對に援兵をうることを知つた時のハンニバルの苦痛は、どんなでせう。一方のローマでは更に又八萬乃至九萬の新しい軍隊を集合し、自由を興へる事を條件として、澤山の奴隷にまで武装させて、あくまでハンニバルを破らうとしてゐます。

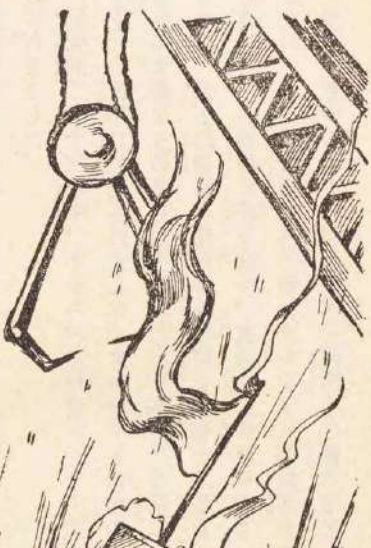
形勢は一變してしまひました。ハンニバルは今度

行つて海に浮べました。そして全部外海に移されたとき、一度にローマの艦隊を襲ひ、或は破壊し、或は沈没させてしまひました。ローマではハンニバルがまだ恐るべき力を持つてゐることを知りました。しかしハンニバルは自分の運命も、カルタゴの運命も、次第に衰へて行き、ローマの勝利の日が段々と近づいてゐることを知つてゐました。

この頃、以前カルタゴの屬國であつて、今も尚ほ澤山の同盟市のあるシシリー島に有力なローマの味方が起りました。そして南部のシラクサスといふ町は、海陸兩方から包圍されてしまひました。しかしこの町にギリシャの技術家でアルキメデスといふ有名な人がゐました。彼の考へ出した防禦法は、この大昔の世界には全く新しいもので、歴史上有名なものです。彼は城壁に狭い隙間を作つて、其の後に射手を配置し、味方は安全で而も敵を十分覗つて打つことの出来るやうにしました。又最も痛快な方法と

しては、城壘から敵の船の軸を掴み上げる器械を考へて作らせたことです。槌子を押すと、掴れた船はそろそろと持ち上つて遂に殆んど棒立ちとなる、するとその器械は突然船を離す、船は飛沫を飛ばして海中に沈んでしまふのです。萬一船が沈まなくとも乗組員は海に投げ出されてしまふのです。

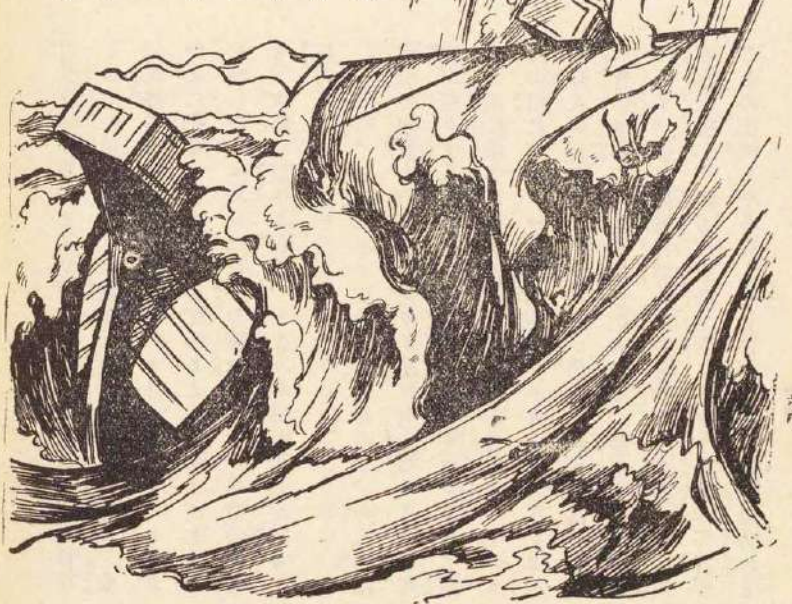
ローマ軍はアルキメデスがこの次にどんな事をやるか分らないと驚いてしまつて、あちこちに綱が引



き廻してあると、その端にはどんな器械が隠されてあるかと思れたほどでした。しかし遂にローマ軍の勝つ時は来て、シラクサスの壯麗な大理石の宮殿は崩され、特にその誇りであつた多くの美術品は、皆ローマに持ち歸られてしまひました。

カルタゴ本國人が、ハンニバルを助力するよりも大切と考へてゐたイスパニアに於ても、形勢は益々悪くなつて來ました。ローマの若い將軍スキピオは父の後を嗣いでその司令長官となつてゐました。彼は偉大な將軍といふよりもむしろ立派な政治家でありました。人を味方に引き入れることに優れた才能を持つてゐましたので、多數の土人が彼の軍旗の下に集り、多くの重要な都市が彼の味方となりました。彼は土人たちがいふやうに「親切によつて征服した」のでありません。

今はイスパニアもやがてローマの手に落ちる運命に迫つたとき、そこに止つてゐましたハスドルバル



は、兄のハンニバルと力を併せるために、軍隊を率ゐてイタリアに向つて出發しました。途中冬を過すためにアーベルネといふところに停り、そこで多くのゴール人を味方に入れ、やがて兄と同じ道をとつてアルプスを越えました。もうその時は九年前ハンニバルが會つた多くの困難はありませんでした。六萬餘の軍はやがて山を越えてポーの平野に着きました。

この時ハンニバルはアブリアに居りました。ハスドルバルは兄へ數人の使者を送りました。ところが不幸にしてその使者は、アブリア近くに陣取つてゐた執政官ネロのために捕へられてしまつたのです。

ネロは直ちに選り抜きの兵士を率ゐて、メタウロス河の南方アドリアアツク海の沿岸にある執政官リュウスのところへ急ぎました。彼等は行軍しつゝ、百姓の運んで來る食物を食べるといふ位、夜は録に眠りもせず、十日足らずの内に二百哩を進みました。

そして夜分こつそりとリビウスの陣に入りましたから、カルタゴ軍は少しも知りませんでした。

翌朝ネロは他の將軍の意見を斥け直ちに開戦することを主張しました。

將軍達はネロの軍隊が非常に疲れてゐることを云ひましたが、彼は耳を掩ふて何ごとも聞き入れませんでした。

信號は與へられました。軍隊は整列しました。ローマ軍が準備した時、カルタゴ軍も又準備をして居りました。ハスドルバルは馬に跨つて軍隊を見廻りました。その時彼は、輝いた甲冑をつけた敵の中に錆びた楯を持った一隊と手入れの悪い馬の群のあることに氣がついて、尙ほその騎手を見ると、彼等の皮膚は南方の日に焼けて黒く、其顔には疲労の色さへあるのを見て、彼は

應援隊の到着したとを知りました。そこで彼は今冒險的に戦ふことの不利を知つて、日没を待つて、靜かに兵を率ゐてメタウルス河に向つて出發しました。彼は其の河をさし挟んで戦はうと考へたのでした。ハスドルバルの考へは訓練の足らないゴール人のために却つて不利となつてしまひました。彼等は戦ひを許されないので失望して、陣營で酒を飲み道傍に倒れてしまつたのです。ハスドルバルの先頭が河を渡つてしまはない中にローマ軍は早や後に迫りました。ハスドルバルは今も最善の方法を盡して戦ふ他なかつたのであります。

數時間は兩軍いづれに勝があるとも知れなかつたのですが、やがてネロの勇敢なる突貫は効を奏して形勢は定つてしまひました。味方の軍勢の崩れかゝつたのを見てハスドルバルは、自ら激勵の叫びを上げながら、再び部下を集めてまつしぐらに敵陣に打ち入りましたが、彼は惜しくもこゝで戦死をしまし



た。このメタウルスの戦は實にローマ軍がカルタゴ軍に勝つた最初のものであります。ネロは勝ち誇つて、ハスドルバルの首を携へて、再びアブリアに向ひましたが、彼がその首をどうしたかは既に前にお話した通りであります。

ネロの凱旋によつてローマ市中には喜びの叫びが溢れ立ちました。それにひきかへて弟の敗北を知つたハンニバルは淋しい心を抱き乍ら、イタリア半島の最南部まで退却するのでした。彼はもう機會を失つてしまつたことを悟らなければなりません。ローマはやうやく長い間の恐怖から救はれ、今後はもはや戦争のことにばかり没頭せず、農業を奨励し、町を再建し、貧民を救助するなど熱心に實力の回復に努めました。

ハンニバルはその有様を見守りながら、尙ほ三年の間はこの半島の南端にあつて、ローマ人に全くの安心を許しませんでした。(をばり)

牢 破 り

(話 童 篇 長)

西 條 八 十



前號までの梗概。佛國騎兵中尉ザエラルは英國軍のために捕へられて、ダートムーアの牢獄に投じられたが、遂にある風の夜、牢を破つて逃出了ました。無我夢中で雨の中を逃げて行くと、途中で一臺の馬車に出遇ひました。それには婦人が一人乗つてゐましたが、見ると婦人の傍に一枚の外套がありました。自分の軍服姿をかくすには、これに限ると思つたザエラル中尉は、夢中でその外套をむんづと掴みました。

七 意外！ 意外！

諸君！ 僕がだしぬけに外套を掴んだ時の婦人の驚きやうつたら無かつたよ。婦人は恐れと怒りとで顔を眞蒼にしながら、聲をふるはせ、

「あ、妾が見ちがへました。あなたは妾たちを助けに来て下さつたのでなく、物取りにゐらしつたのですね。あなたは紳士のやうな風をして、實は泥棒なのですわ！」と叫んだ。

「奥さん。さう仰有るのはごもつともですけれど、こ

れには深い事情がありまして、いま僕にはこの外套が何よりも入用なのです。そのわけはいづれ申上げる時がありませう。さうしてもし御主人のお住所だけ聽かせて置いて下さつたら、キツト後でこれはお送り返しますから。」

僕も一生懸命になつて頼んだ。

婦人の顔はこれを聞いてすこしく和らいだ。が、なほもわざとむづかしい顔をして、

「わたくしの主人はチャールズ、メリデイス男爵です。或る大切な、政府の用向を帯びてダートムーアの牢獄へ参るところです。とにかく主人の物には手をつけないで置いて下さい。そしてあなたは早く何處へか行つて下さい。」

「でも……」僕はなほ一言二言婦人に辯解を試みようとした。が、その途端、僕は遠くで何やら人の叫び聲を聞いた。と、それに答へて、少年の馭者はいさなり「オーイ」と、どなつた。見ると雨風の間の

中を一つの提灯がこつちへさして近づいてくる。これには僕もすこしあわてた。

「ちやあ奥さん、これで失禮します。その代りこの外套は出来るだけ大切に扱ひますから。」

僕は恭々しくもう一べん頭をさげて、外套を小脇に抱へて、雨の中を駆け出した。少年の馭者は一寸僕をおさへやうとしたが、とても敵はないと思ひ返したか、直ぐすなほに路をあげた。

駆けつけた、駆けつけた、ふたたび一目散に僕は駆けつけた。相變らず風の吹いてくる方に鼻をむけて、ほとんど息が切れて倒れかゝるまで僕は駆けつけた。それから五分間ほど、藪の中で休んだが、またまた直きに出發した。なにしろ十二年間も陣中で鍛へた鋼鐵のやうな筋と骨だ。僕がどれほど猛烈に駆けたか諸君にも大抵想像がつくだらう！

時間にしたら、それからあと約三時間、僕はろくろく休まずに走りつづけた。ズーツと風の吹く方へ

顔を向けてた。もうかれこれ牢獄から十里は大丈夫
離れたらうと僕は考へた。と、もう夜はそろ／＼白
みかけてきた。そこで僕はわざと人目にかゝらぬや
う、路ばたの小山のてつべんにのぼつて行き、その
叢の中にこもりと横になつた。もう一べん日が暮
れるまで、一日中人目を避けてそこで寝通すつもり
だつたのだ。こんな工合に雨風の下で寝ることは、
僕として大して珍らしい事ぢやない。分捕した厚い
上等の外套に包まつてゐると、そのうち、いつとも
なく氣もちよく、うとうとと眠氣がさしてきた。

僕はかなりながく眠つた。けれどもそれはあまり
愉快な眠りでは無かつた。僕はさんざ厭な夢を見て
ひとりでジタバタ草の中を轉がつてゐたらしい。中
でも前後に見た夢は、何でもわが軍が殆んど全滅し
て、自分だけが一頭の瘦馬に跨り、生き残つた手下
の一個中隊を懸命に指揮してゐるところだつた。僕
は鎧に足を踏んばつて聲をかぎりに叫んだ。

八 青色の封筒

諸君！ 僕がその時足下に見たものを何だと思ふ
か？ それは僕が昨夜逃げ出したダートムーアの牢
獄の屋根なんだよ！ それが陰氣な、無氣味な、怪
物のやうな恰好をして足下にひろがつてゐるぢやな
いか！

この調子ぢや昨夜僕がもう五六分間も暗の中を駈
け續けたら、軍帽を牢獄の塀にぶち當てたかも知れ
なかつたのだ。

僕はあまりの事に呆れ果て、一體何處が如何し
てこんなわけになつたのか、中々考へつかなかつた
が、しばらくすると一切が明白に分つて来て、僕は
失望落膽のあまり、自分の頭を拳固でグワン／＼擲
つた。

つまり、昨夜は風が北から南へと變つたのだ。そ
れを自分が氣がつかずに、終始風の吹く方に鼻面を

「佛國皇帝陛下萬歲！」

と、僕が叫ぶと同時に部下の兵等がおなじやうに、
「佛國皇帝陛下萬歲！」

と、叫ぶ聲が耳もとに雷のやうに聞えた。

「ハッ」として僕はおどろいて草の上の夢からさめ
た。さうして夢の中で聞いた叫聲の未だに耳で鳴つ
てゐるのを感じながら、起直ると、どうだらう！

諸君！ 僕は目をこすつて、自分の氣が狂つたの
ぢや無いかと疑つたよ！ と云ふのは、今夢の中で
聞いたのおなじ「佛國皇帝陛下萬歲！」といふ
聲が、何千とも知れない多くの人の叫聲となつて、
その時僕の足下の方からハッキリ湧き起つたぢやな
いか！

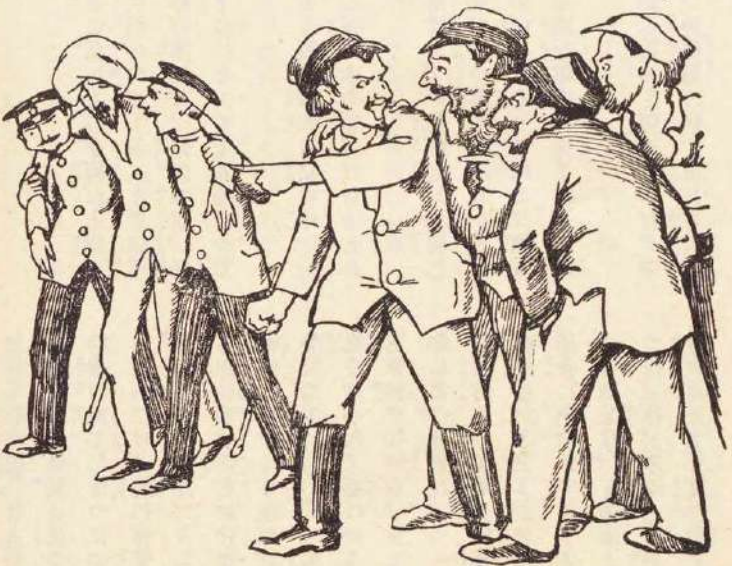
「これは」と思つて、僕が藪蔭から首を出し、朝の
明るい日光の中で、下の方を見ると、まあそこには
どんな意外な光景が展開つてゐたらう。僕は氣絶す
るばかりに驚いてしまつた！

むけて駈け通したのだから、結局五里駈けたとこ
ろをまた五里駈け戻つて、ぐるりと大廻りしてもと
の處へ出てしまつたのだ。

あれだけ苦勞に苦勞をかさね、一晚中跳ねたり、
飛んだり、轉んだりした揚句がこの通りもともとと
と思ふと、悲しいのを通り越して、なんだか無性に
可笑しくなつてきた。僕は藪の中に倒れて、ひとり
で笑つて、笑つて、笑ひ抜いた。しまひには横腹が
痛くなつた。それからヂット外套にくるまつて、大
空を仰ぎながら、さてこれから如何したものかと眞
剣に考へ始めた。

諸君！ 僕が長い軍人生活の間に習つた、一つの
教訓はかう云ふことだつた。それはどんなに辛い
場合に出會つても、それを最後まで見ない中は不幸
だと云ふな、と云ふことだ。で、この場合もさうだ
つた。僕が不幸だと思つたこの出來事が、却て僕の
身にはうまく倅ひをしてくれたのだつた。と云ふの

は牢獄の番卒どもは、その尊僕の行方を捜すのに、まづ僕が昨夜チャールズメリデイス男爵の外套を奪つた場處を中心にして始めたからだ。かれらの誰一人だつて、僕が一旦逃げた路をまたとつて返して、牢獄のすぐ裏手の山の藪の中で、ノン氣に寝てやうとは夢にも想はなかつたらう！ で、残つたわが同僚の佛蘭西兵たちは、例によつて逃げた戦友の前途を祝ふために、揃つて萬歳を叫んでゐたのだ。今自分が夢の



七六
中でまた夢から覺た後で聞いたのは其聲だつたのだ。その同僚たちとてもさうだ。今自分等が萬歳を唱へてゐるその肝心の牢破りの本人が、窓からすぐ見える山の上で此方を見てゐようとはまさか氣が付かなかつたらう。しかし僕の方からは、かれらが三々伍々大きな運動場の中にかたまつて、いん／＼な身ぶりをして僕の逃走の噂をしてゐるらしいのがよく見えた。そのうちに何やらしきりにガヤ／＼罵る聲がしたのでふと見ると、背高のボー

モントが頭中白い細帯をして、二名の看守に扶けられて運動場を通る所だつた。これを見た時の僕の心中の嬉しさつたら無かつた。それは、一つは自分がボーモントを殺さずに済んだと云ふ喜びと、それからもう一つはほかの佛蘭西兵たちが昨夜の事件の真相を知つてゐるといふ喜びだつた。もと／＼平素の僕を知つてゐるかれらは、まさか僕がボーモントを置きざりにして逃げ出したと考へる筈は無いのだ。そんな工合で、その日一日中、僕は時刻を知らせる牢獄の鐘の音を聞きながら、藪の中に忍んでゐた。僕のポケットにはかね／＼牢中で蓄へて置いた麵麩があつた。それから昨夜借りてきた外套の衣匣を捜すと、水をわつた上等なブランドーが一杯入つた銀の水筒が出てきた。そこで僕は大した饑もなくその一日を凌ぐことが出来た。外套の衣匣には、水筒のほかは二三の品物が入つてゐた。赤い絹のハンケチが一枚、それに鼈甲の

喫煙草入と、それから赤い封緘をした青色の封筒、その上書きはダートムーア牢獄の總監宛だつた。で僕は最初の二品は、いづれこの外套を返す時に一緒に届けてやらうと思つた。だが、青色の封筒の始末には少々弱つた。と云ふのはダートムーア牢獄の總監といふのはたいへん好い人で、いつも僕に親切にして呉れたから、この際その手紙の横どりをすると云ふことはひどく氣が咎めたのだつた。で、僕は日が暮れるのを見はからつて、ソツとこの手紙を牢獄の堀から投げ込もうかと思つた。が、よく考へると、それでは結局自分がまたこの近所にワロつてゐるのを、わざ／＼先方へ知らせるやうなものだつた。そこでいん／＼思索したあげく、とにかくこの手紙は當分自分が預つて置いて、いい傳手があり次第に總監のところへ届けることに決めた。僕は何の氣なしそれを內衣匣の底へ大切に藏ひ込んでしまつたのだ。(つゞく)

本所の雀

落谷虹兒

米屋の米倉 倒れたよ

油屋の種倉 倒れたよ

本所の雀は 焼け出され

おうちは今頃 火の海だ。

飛んで来は来た 知らぬ町

そこらにお米屋 ないかしら

雨は冷めたい 秋の雨

そこらに傘屋 ないかしら。

父さん雀は 頬かむり

母さん雀は 文庫しよつて

赤ちゃんのお手々を ひいてくる

本所の雀は 逃げて来た。





鈍栗山

(第九回)

沖野岩三郎

進軍令

「法性院様、面白い事が起りましたよ。」
 「大急ぎで鈍栗山に登つて来たチョン、は言ひました。」
 「へえ、どんな面白い事ですか。」と法性院は眠さうな眼を、しよぼつかせながら言ひました。

「實はネ、稻荷大明神の神主殿と、吒枳尼天を祀つてあるお寺のお坊さんとが喧嘩をしましてネ。」
 「うん、それは知つてゐる、詳しく聞きました。」
 「それで、今、大騒ぎなんです。稻荷様の神主様が、社の外に祀つてあつた、あの瀬戸物の狐をお坊さんに投げつけるやうにして、呉れてしまひました

ので、あの稻荷様には狐が居なくなつたと云ふ事が村中へ知れたのです。」

「うん、それも知つてゐる、詳しく聞きました。」
 「村の人達は、あの稻荷さんに手を合せて、相場であまく儲かるやうに、安く買ったものが高く賣れるやうに、博奕を打つても勝つやうに……どうぞ兵隊さんの検査に合格しないやうに、など、云つて拜んでゐたんです。」

「死んでも生命のあるやうにツて拜んだ者もあるんでせう？ 人間といふものは、こんな無茶な事をいふかも知れないよ。」

法性院は、さう云つて苦笑ひをしました。
 「あの人間達は、稻荷様といふのは、どんなお方だか、何を祀つてあるんだか、そんな事はちつとも知らないんです。ただ表に二足の狐が置いてあるので、それを無闇に拜んでゐたんです。所が神主様とお坊様との喧嘩で、今まで稻荷様にあつた二足の狐が、

お寺の吒枳尼天へ持つて行かれたので、村の人達はその翌日から稻荷様へは、ちつとも参らないで、皆なお寺の吒枳尼天へ参るやうになつたので、お坊さんは大喜びです。何でも昨日一日だけで、豆腐の油揚げが八百枚も上つたさうです。」

「豆腐の油揚げ、何の事ですか？」
 「それはネ、大豆で作つた豆腐といふものを、油で揚げたのです。」

「油つて一體何ですか、其がわからないんですよ。」
 「油つて、まあわかり易く言へば、雨見たいなものです。」

「豆腐を雨に濡らしたんだネ。」
 「そんなものだ。食べてみると、可なり旨いものですよ。それで作つたオスシを、イナリズシと言ひます。」

しか参らなかつたのです。所が其の面白く事が起つたのです。』

『どんな事が起つたのです？ お嬢さまの供へた握り飯が無くなつたといふのでせう。』と、法性院は笑ひ乍ら言ひました。チヨンは驚いたやうな顔つきで、

『さうです、酒屋のお嬢様は、瀬戸物の狐が見えないので、持つて行つた小豆のお握りを其のまゝ持つて歸らうとしますと、社の床下に狐が居るから供へて置いと、神主が申すので、其の通りして置くと、直ぐそれが無くなつてゐたといふ事です。』

『それから人間共は、どうしたのです？』
法性院は可笑しくて、堪らない様な顔をしました。



『酒屋のお嬢さんは走り歸つて、其事を村の人達に言ひました。けれども誰も信じませんでした。お嬢さんだけは、本當に狐が居ると言ひ張つたのです。そして翌る朝も、小豆御飯のお握りを七つと、豆腐の油揚げを十枚とを供へに

来たのです。』
チヨンが、そこまで言つた時、法性院は、
『うん、あれが豆腐の油揚げといふのか。さうか、わかつた。』と、うなづきました。

『所が、それを供へて置いて、一寸横の方を見て、もうそれが無かつたといふ事です。それで、いよくあの稻荷大明神の床下には狐が居るといふ事になつて、神主と、其のお嬢さんとが、其事を村の

人達に話すと、丁度村には東京の學校へ行つてゐる若い書生さんが、十四五人歸つてゐたので、(そんな馬鹿な事があるものか、それは迷信といふものだ。吾々が行つて調べてみる!)と云つて其日の正午過ぎ、皆な手々に得ものを提げて稻荷大明神の社へ来て、其の床下の穴の中を調べてみたが、何にも居ませんでした。そこで村の巡査さんは、神主と酒屋のお嬢さんと呼び出して、(無根の事を言ひふらして人を欺むてはいけない!)と云つて、ひどく叱りつけたといふ事です。けれども神主も、お嬢さんも、實際にお握りが無くなるんだから、明日の朝は巡査さんも一緒に来て、小豆御飯のお握りと、油揚げとを供へて置いて、それを張番してゐるんだと云ふ事です。若し明日の朝、あの稻荷大明神の床下に、本當の狐が居るといふことにきまつたなら、吒枳尼天へお参りに行つた連中は、又た稻荷様へ行く事になるんです。』さう言つた時、チヨンは思ひ出したやうに、

『あ、今日は僕、與兵衛爺さんと一緒に隣村のお祭りを見に行くのだ。』と云つて、急いで麓の方へ降りて行きました。そこで法性院は大きな聲で、
『おい、奇妙院殿、八角院殿、ちよいと此所へ来て下さい。』と言ひました。
岩の後で木の實をかちつてゐた奇妙院と、木の枝で坐睡りをしてゐた八角院とは、眼をさよろくさせ乍ら法性院の所へ、のそくと出て來ました。
『奇妙院殿、八角院殿、一寸お願ひがあるんだが、聞いて下さいませんでせうか。』と法性院は頭を傾げながら申しました。
『へい、どんな御用です？』と八角院は頭を掻き掻き言ひました。
『いよ、あの稻荷様と吒枳尼天様との喧嘩が面白くなつて來たんだ。明日の朝は、奇妙院殿は五疋の家來をつれて、稻荷様へ行つて下さい。八角院殿は七疋の家來をつれて吒枳尼天様へ行つて下さい。』

「稻荷様へ握り飯を取りに行くのですか。」
 「吒枳尼天へは何を取りに行くのですか。」
 と奇妙院と八角院が問ひました。
 「さうだ、今日の夕方になると、奇妙院殿は五足の家來をつれて、あの稻荷様の床下へ隠れ、八角院殿は吒枳尼天様の床下に隠れて夜明を待つてゐて下さい。馬鹿な人間共が、小豆飯だの油揚げだのを持つて來て供へるに違ひないから、それを皆な床下へ引込んで待つて居て下さい。天とうさまが、あの松の木の一の枝の所へ昇つた頃に、青蓮院殿は二十足の家來をつれて稻荷様へ、私は二十五疋の家來をつれて吒枳尼天様へ行きますから。あなた方はそれまで床下で辛抱してゐて下さい。」と法性院は智慧深さうに言ひました。喧嘩好きの奇妙院と八角院とは大喜びで日暮を待つてゐました。

東京から歸つて來た學生さん達は、小學校の講堂

てゐるかも知れないよ。」と他の一人が言ひました。さうしてゐるうちに、山から降りて來たのは確かに五六人の子供らしかつたので、學生さん達は、てつきり乞食の子供だと思つたので、大きな聲で、
 「こらッ！ 其所へ來たのは誰だ！」と言ひました。けれど返事が無いばかりか、五六人の子供の影はすうツと消えてしまつて、見えなくなりました。學生さん達は不思議で堪らないので大きな聲で、
 「こらッ！ 乞食奴！」とどこへ隠れ居つたか、早く出て來い」「貴様達は神主に頼まれて、あの床下へ入つて居て、酒屋のお嬢さんの供へるものを食べたんだらう？」などと口々に呼びましたが、乞食の子供の影も形も見えませんが、學生さん達は少々氣味悪くなつたので、鳥居の所へ來て、息を殺して様子をみてゐますと、高い樫の枝からする／＼と降りて來たものがありました。
 「おや、乞食の子は、あんな所へ登つてゐた。」と言

へ集つて、いろ／＼相談した結果、あれは屹度神主や坊さん達が、狐が居るとか何とかいゝ加減な事を言つて、迷信家を欺すのに違ひない。だから今晩は七人宛A組B組の二組に分れて、稻荷様と吒枳尼天様とへ行つて、神主や坊さん達が、どんな事をするか見てやらうといふ事になりました。で、夕方になるとA組は柔道着を着込んで、手々に竹刀を提げて稻荷様の社へ出かけて行き、B組は運動服を着て、野球のバットを一本づゝ肩げて吒枳尼天様の境内へ繰込みました。A組の七人は稻荷様の庭にある大きな樫の木の前で待つてゐますと、丁度九時と思はれる頃、山の上の方から、ば／＼と落葉を踏鳴らしながら降りて來るものがあるので、倍こそ：と皆な竹刀を握りしめて待つてゐました。
 「屹度神主が、廻り道をして山から降りて來たんだよ。」と一人が囁きました。
 「乞食の子供が、狐に化けて、あの社の床下へ隠れ

つて、一人の學生さんが駆け出さうとすると、今度は向ふ側の樫の樹の一番高い枝を、ぞ、ぞ、ぞと揺ぶるものがありました。
 「おや、乞食の子は、あんな所へ登つてゐる！」と言ふか言はないうちに、今度は學生さん達の居る、頭の上の高い松の樹の枝から、一尺ばかりの枯枝を二三本、ば／＼と投げおろすものがありました。吃驚して振仰いでみると、乞食の子供が三人、高い枝の上に、坐つて、下を見おろして居ました。
 「おい／＼、あれは人間ぢやア無い！」と一人が言ひますと、他の一人も、
 「さうだ、屹度天狗の子だ、子天狗だ！」と云ひました。さア、さうなるとA組の七人は、もう恐ろしくて堪らないので、後をも振向かないで、一生懸命、吒枳尼天の方へ走つて行きました。吒枳尼天の方ではB組の七人が、社の前で相談してゐました。
 「なアに、狐なんか居やアしないさ。屹度此のお寺

のお坊さんが、犬か猫かをつれて来て、社の床下へ隠して置くんだらう？」

「さうかも知れない。だから、あの社の扉を、さうツと開けて、我々は中へ入つてゐようぢやないか。」

「それがいい、それがいい。」
相談が決りました時、表の方から、どん／＼と駆け込んで来たのはA組の七人でありました。

「どうしたんだい？」とB組の一人は問ひました。

「天狗だ、天狗の子だ、子天狗だ！」

「えッ、天狗だ？ 天狗が何所へ来た？」

「稻荷様へ来た、今に此所へも来るかも知れない？」

「そんな馬鹿な事があるかい？」

「ある／＼、迷信でも何でも無い。論より證據だ。僕達は實際に見たんだ。」

「ではA組B組合計十四人は、あの吒枳尼天の社の中へ入つて様子を見よう。」

そこでA組とB組とは、お坊さんに知られないやうに、吒枳尼天を祭つてある社の中に入つて、床板を引はづして、床下の圓い穴の中から代る／＼外を見てゐました。すると九時過になつた頃、穴の外へ、何だか知れない黒い小さい影が月明りに見えました。

「来た／＼、天狗が来た！」と一人が言ひますと、他の一人が、

「馬鹿言へ、乞食の子だ！」と言ひました。が、其の言葉の終らないうちに、二人共床の上へ逃げ上つて来ました。十四人は氣味悪く思ひながら、床下の穴の所を見てゐますと、子供のやうな頭を、外から差入れて来たと思ふと、眞鍮のやうな二つの眼玉が、闇の中できら／＼と光りました。それを見た十四人は、「大變だ！」と言つて一度に扉を押開けて外へ飛び出しました。けれどもB組の大將は大膽な學生さんだつたから、一人踏み留つて庭のぐるりを見てゐますと、東の高い松の枝の上に、一疋の天狗が居ました。(つづく)

「あ、天狗が居る！」と思つて、バットを振り肩げて、きツと枝の上を見ますと、天狗はひらりと二間ばかりもある下の枝へ跳び降りて、其所から木の枝を折つて、大將の方へ投げました。大將はびっくりして、バットで其の枝を受

けとめました。西の松の枝から、ばら／＼と小さい枯

枝を投げる者がありますの

で、振仰ぐと、其所にも一

疋の天狗が居ました。

「あ、あしこにも子天狗が

居る。」と思ふうちに、右か

ら左から、ごそ／＼と天狗

が二疋も三疋も出て来ましたので、大將はバットを

其所へ投げ捨て、村の方へ逃げてしまひました。

翌る朝になると、村中は大評判でした。

「稻荷様のお供へものを召し上げるのは、小天狗ださ



うな。」

「吒枳尼天様の油揚げを召上げるのは、中天狗ださうな」

「今朝稻荷様と吒枳尼天様とへ、お参りする者は、

其の小天狗中天狗様を拜む事が出来るさうです。」

「小天狗様も中天狗様も、小

豆御飯と油揚げがお好きだとい

ふ事です。」そんな評判が立つ

たので、朝から村中の人達は

大狗様を拜みたいために、小

豆御飯のお握りと、油揚げとを

もつて、稻荷様と吒枳尼天様

とへ押かけました。

山では法性院と青蓮院と

は、四十五人の家來を二組に分けて、各々に號令をか

け、番號を言はせて、山の下の方へ進軍する準備をし

てゐました。奇妙院と八角院とは、床下に居て、御馳

走の來るのを今か／＼と待つてゐました。



大地震

八九

お稻荷様のお祭りが近づいて来ました。で、村の人達は町の人を見ると直ぐ、

「あなた方は、この廿二日の朝、村のお稻荷様へ御参詣なさい。あしこには本當の生きた狐が居らつしやいます。その狐はコン／＼様と申して、油揚と小豆御飯のお握りが大好物です。それを差上げると、コン／＼様は、きつと人間に「福」を下さいます。病氣も癒して下さいますし、願ひごとは例でも聞いて下さいます。あなた方は是非、油揚と小豆御飯とをもつて御参詣なさいまし。」と言ひました。

町の人達は村の人に出會ふと直ぐ、

「あなた方は、この二十二日のお祭りには、是非町の吒枳尼天へお詣りなさいまし。もう村のお稻荷様には、ミケツネ様が居らつしやらないのでございませす。所がこちらの町の吒枳尼天様には、多勢のミケ

ツネ様が居らつしやいまして、油揚でも小豆御飯でも何でも、お供へ申すと直ぐにそれを召上るさうです。そして其のお供へをした者には「福」を與へて下さいます。金儲けをさせて下さいますし、病氣は癒して下さいます。是非こちらの吒枳尼天様へお詣りなさいまし。」と言ひました。

村の人半分は吒枳尼天様へ参詣したいと思ひ、町の人も半分は、お稻荷様へお詣りしたいと思ひました。

そして一日二日は町中村中大評判で、お稻荷様が勝つか吒枳尼天様が勝つか、もし本當のコン／＼様やミケツネ様が出なかつたなら、其の出なかつた市の社を打ち毀さう、若し本當にコン／＼様でも、ミケツネ様でも出たなら、その出た市を皆な氏神様にして、立派な大きなお社を建てようといふ事になりました。

それを聞いた神主様に大喜びでした。早速村の人

達を集めて、

皆さん喜んで下さい。今度はこの稻荷大明神も立派な社になりますぞ。此所には稻荷大明神の御使ひであるコン／＼様が澤山あらつしやる。その證には此間酒屋の娘が、供へた小豆御飯と油揚げが見る見る無くなつておました。それから毎朝々々供へるお供へが、みんな綺麗に無くなつておます。あの猪士の上に獸の足あとが澤山あるのを見ても、コンコン様が多勢居らつしやるにきまつておます。今度の競争は、こちらが大勝利な事疑ひありません。吒枳尼天の方には瀬戸焼の狐があるだけで、コン／＼様は一疋もいませんから。」と申しました。それを聞いた村の人達は大喜びで、皆な等だの塵取だのを持って、早速お稻荷様へ出かけて行つて、そして宮の境内を、塵一つないやうに綺麗にお掃除しました。

そこで神主様は拍手をばん／＼と拍つて、「南無稻荷大明神、明朝は村の人達や町の人達が何百人も参

詣致しますから、どうぞ「福」を與へてやつて下さいまし。そのかはりこん／＼様には、油揚げの小豆御飯だのを澤山々々差上げますから。」と拜みました。するとお掃除をした人達も、皆な聲を合せて、

「その通り、その通り……」と拜みました。神主様は村の人達を自分の家へ伴れて行つて、皆なにお酒を飲ませ、明日の大勝利の前祝ひを致しました。

村の人達は、皆なお酒を飲んでぐだぐだに酔拂つて、神主様のお家で寝てしまひました。

町の吒枳尼天様の方では、どうしたのか、お祭りが近くなるに随つて、お坊様の顔色がだん／＼青くなつて來ました。

それを見た町の人達は、どうしたのだらうと思つて、

「お坊様、御病氣でございませうか。」と尋ねますと、お坊様は、

「いゝえ、病氣ではありません。」と申しました。

「でも、大變お顔色が悪うございます。」と言ひますと、

「悪い筈ぢや。」と申しました。

「悪い筈とは、どう云ふワケでございませうか。」と尋ねますと、

「もう明日は廿二日ぢや。」と申しました。

そこで町の人達は一所へ集つて、いろ／＼と相談を致しました。

「廿二日が來ると、お祭りだから、お坊様は喜んで下さる筈なのに、何故あんな青い顔をして居るのでせうか。」と言つて、皆な考へてゐましたが、どうしても理由がわからないので、も一度お坊様に其のワケを尋ねてみる事になりました。

一人の一番賢い男が行つて恐る／＼、

「お坊様、明日は廿二日で、此所の吒枳尼天様のお祭りでございますが、私共はあのお稻荷様と競争して、どうしても吒枳尼天様に勝つて戴かねばならな



いと思つてゐるのでございます。お坊様お願ひでございます。どうかこれから吒枳尼天様へ、お經をあげて、明日の朝、町の人達や村の人達がお詣り致しました時、ミケツネ様を多勢お呼びよせになつて、その人達の供へる油揚げの小豆御飯だのを皆なに見て居る前で、むしや／＼と食べてしまつて下さるやうに吒枳尼天様へお願ひ下さいまし。どうぞお願ひ致します。」と申しました。

それをきいたお坊様は、靜に頭を掉つて、

「駄目々々、ミケツネ様といふのは、瀬戸焼の狐ではありませんか。あんな焼物が御飯粒一つ食べられるものですか。」と申しました。

それを聞いた賢い男は、

「いゝえお坊様、瀬戸焼のミケツネ様でも、きつとお供物を食べます！」と申しました。

「なに？あの瀬戸焼のミケツネ様が何か食べたのを見ましたか。」

お坊様は不思議さうに賢い男の顔を見詰めました。「かうしてお供へものを食べさせるのですよ。」と言つて、賢い男はお坊様の耳の所へ口を寄せて、そひそと囁きました。

「うん、さうか、成程……」と云つて聞いてゐましたお坊様は、嬉しさうに、ハ、ハ、と大聲で笑ひました。

「お坊様御安心なさいまし、明日の競争は屹度こちらが大勝利ですよ。」と言つて、賢い男が歸つて行きますと、お坊様の青い顔が、だん／＼紅くなつてきました。

賢い男は家へ歸ると直ぐ、奥の一室に敷いてあつた熊の皮の敷物を一尺四方に切つて、大きな手袋を十ばかり造りました。そして、近所の若い男を十人程集めて、お酒を飲ませました。

若い人達はお酒の御馳走になつて、歌つたり踊つたりしてゐますと、賢い男は

そして俺達を狐にするつもりですか。」

若い人達は顔を真紅にして怒り出しました。

「まあ、そんなに腹を立てるものぢやありません。静にして私の言ふ事をきいて下さい。」と云つて賢い男は、奥の一室から大きな毛むくぢやらない手袋を十ばかり持ち出して來ました。

それを見た若い人達は吃驚して、

「まあ、それをどうなさるのです？」と訊きました。そこで賢い男は聲を潜めて、

「あなた方は五人づゝ兩方へ分れて、一組はあの村のお稻荷様へ行くんだ。そしてお稻荷様の社の戸を開けて中へ入つて、中の床板を外して、あの床下の所へ入るんだ。そこには三方に直徑五寸ばかりの穴をあけてある。その穴の外へ大勢の參詣人が油揚げの小豆御飯だのを供へに來るから、供へて置いて手を合せて「福」を與へて下さいと拜むから、其時だ、この熊の皮の手袋を右の手にはめて、そのお供へを掴

「皆さん、誠に申し兼ねますが、私のお願いを聞いて下さいませんか。」と、云つて、疊に頭をすりつけて叩頭をいたしましたので、若い人達は皆な静り返つて、

「何ですか。」と申しました。

「外でもありませんが、明日のお祭りにはお稻荷様へはコン／＼様が出ると云ひ、吒枳尼天様へはミケツネ様が出ると云つて、大評判ですが、あなた方はどちらが勝つて欲しいとお思ひなさる？」と賢い男は申しました。

「それは吒枳尼天様に勝つて貰はなくしては、此町の面目が潰れます。」と若い人達は皆な答へました。

「所がこちらの吒枳尼天様には、實際生きたミケツネ様は居ないんだ。だから誠に申兼ねますが、あなた方は、そのミタツネ様になつて下さいませんか。」と申しました。

「何ですつて、あなたは僕達に酒を飲まして置いて

んで拜んでゐる者の頭へ、思ひきり投げつけるんだ。さうして來る者も來る者も、皆な投げ返してやると皆な恐がつて逃げてしまふ。そしたら残りの參詣人は皆な吒枳尼天様へお詣りするに違ひない。そこでだ、あとの五人は矢張り吒枳尼天様の床下へ入つて、あの三方にある穴の中で、熊の皮の手袋をはめて、肩を脱で腕には真黒く墨を塗るんだ。そして參詣した人が、穴の口へ油揚げの小豆飯だのを供へて、南無吒枳尼天様、どうぞ私の病氣をなほして下さいまし……」と言つて拜んでゐるうちに、そつと其のお供へを穴の中へ引ッ込むんだ。拜んでしまつて頭をあげて見ると、もう其所にお供へが無いとすると、參詣人は皆なびつくりして、ミケツネ様だと思つて喜ぶに違ひない。もしお金を供へるものがあったら、それを皆な君達にあげるから。」と申しました。

それをきいた者者達は、手を拍つて笑ひました。

「そいつは面白い〜。」と言つて、五人宛二組に分れて闇に紛れて、お稻荷様と吒枳尼天様へと向ひました。

村や町に、そんな事があるとは夢にも知らない山の上では、五十疋の猿が勢揃ひを致しました。

法性院の家來三十疋は、八角院といふ一番強い猿を先頭にして、町の吒枳尼天に向ふ事になり、青蓮院の家來二十疋は、奇妙院といふ一番喧嘩好きな猿を先達にしてお稻荷様へ向ふ事になりました。

法性院は大きな鈍栗の樹の枝から、天にも響くやうな大きな聲で、

「氣をつけ。」と叫びました。五十疋の猿は皆な一列に並んで氣をつけました。

「皆さん、これから二隊に分れて村と町とへ出て行くのであります。今日は二十二日で、人間共が稻荷様と吒枳尼天様とのお祭りをする日であります。人

間共は皆な狐が出て来て、油揚げの小豆飯だのを食べると思つてゐるのです。その狐をミケツネ様とか、ゴン〜様とか云つて、人間に不思議な力と與へる、大變偉い者の様に迷信してゐるのであります。だから五十疋が二隊に分れて、これから堂々と進んで行く事にします。こんな時人間の眼には狼でも狸でも、何でも神様に見えるのであります。だから石一つ投げる者も、鐵砲を一つ射つ者もありませんから安心して、堂々と乗込むのであります。そして供へてあつたものを、皆な出来るだけ引つ抱へて歸つて来るのですが、澤山あればそれを何度でも山へ持ち運ぶのも面倒だから、順々に取次いで山の上へ投げあげる事にします。しかし、皆さんはこれから暫くの間、神様になるんだから決して人間の前で御飯一粒だつて食べてはいけません。歸つてから腹一杯食べさせてあげますから。これで終りであります。」

法性院がかう言ひました時、山の峰から百疋ばかりの猿が駈けて来て、私達にも是非お供をさせて下さいと頼みました。

そこで法性院と青蓮院は相談の上、その百疋を二組に分けて、義勇兵の資格で同行する事を許しました。

「前隊前へ！」と號令をかけた時、八十疋と七十疋との二組は、皆な手に手に枯枝を掲げて、足並を揃へて山を下へ〜と降りて行きました。そして柿の木在所から右と左に分れて、一隊はお稻荷様へ一隊は吒枳尼天へと向ひました。

夜はほの〜と明け放れました。村の人や町の人も皆な吾〜に新しい着物を着更へて、お稻荷様へ行くもの、吒枳尼天様へ行くもの、右に左に廣い路も狭い道も大變な雜沓でした。



熊の皮の手袋をはめた十人は五人宛兩方に別れてお稻荷様と、吒積尼天様との床下に隠れて、今か今かと参詣人の来るのを待つてゐました。

山の上から降りて来た青蓮院の引率する七十疋の猿が、お稻荷様のある所から二十回はかりの上の熊笹の藪まで来た時、青蓮院は小さい聲で、

「皆さん、もう餘程人間共が宮の庭に集つてゐます。馬鹿な人間共が、お供へを皆なあの圓い穴の所へ供へてしまつた時、吾々はこゝから列を亂さないやうに出て行きませう。」と言つておつと下の方を見しあますと、白い衣を着た神主が、鳥井の所に立塞つて、

「皆さん、そんなに一度に押寄せて来ては困ります。お供へものは、此所に大きな籠がありますから、一先づこれへお入れ下さい。さうすれば、これを私はあの穴の所へ供へて、私が皆さんに代つて拜んであげます。さア、この籠へお入れになつたら、其所の檜の木の下に座つて、コン〜様が、お供へを召し

上るのを御覽なさいまし。」と言ひました。すると多勢の参詣人は、争つて、油揚げと小豆御飯とを其の籠の中へ入れました。見る／＼大きな籠に二十杯程のお供へが、お稻荷様の庭に据ゑ置かれました。

「大變だなア！」と青蓮院は言ひました。

其時でした。一定の猿が、「おや！ 變だぞ！」と言ひますと、地の底が、ド、ド、ド、と鳴つたと思ふと、やがてぐら／＼ぐらアと天地が引ツくり返りさうに揺れました。

「地震だ、地震だ！」と人間共が叫びました時、山の樹の枝が、ざ、ざ、ざと右に左に揺れて、お稻荷様の屋根が、三尺程右へ傾いたと思ふと、ぱり／＼ぱり／＼と音がして、お社が三間ばかり向ふへ飛びました。と、同時に顔と腕との眞黒いお化が、毛むくちやらかな右の手をあげ乍ら、床下の所から駆け出して来たので、それと見た見た青蓮院は、

「大變だ／＼、お稻荷様が飛び出して来た。皆なあの檜の樹の上に駆け登れ。」と號令しました。

それを聞いた七十疋の猿共は、ばら／＼と一時に熊笹の藪を駆け出して、檜の木の方へ突進しました。

お化に膽を潰してゐた参詣人は、この猿の一群を見て更に吃驚仰天して、押し合ひし合し、轉びながら村の方へ逃げてしまひました。お化も人込の中へ一緒に逃げ込んで助けて呉れ！ と泣聲を出してゐました。

地震は二回も三回も揺りましたが、猿は家の倒れる心配も火災を起す氣遣ひもありませんので、

「ひどい地震だつたネ。」と云ひ乍ら檜の木から降りて来て、御馳走の一杯づゝ入つてゐる二十の籠を擔いで、山の頂へ歸つて行きました。そして青蓮院が頓栗の樹の上から眺めると、町の方から、八十疋の猿が、大きな四角なものを三十ばかり擔いで山を登つて来るのが見えました。



暫くすると町からも村からも、ぼうっくと煙がのぼりました。

「人間の家が燃える〜」と言つて、猿達が町の方を見てゐると、法性院の一隊が、白い大きな箱に一杯御馳走を詰めたのを、三十箱擔いで来ました。

「大成功でしたね。」と青蓮院が申しますと、法性院は、静になつて、

「君、吒枳尼天様といふのは、顔と右の手とが眞黒で右の手のさきだけ熊のやうに、毛むくちやらなものだつたよ。」と、云ふと青蓮院も驚いて、

「僕の見たお稻荷様も、さうでしたよ。」と申しました。

「では稻荷様も、吒枳尼天も同じものだネ」と奇妙院は言ひました。

「さあ〜、御馳走を食べませう。」と言つて、百五十疋の猿が、小豆御飯と油揚げとを食べてゐる所へ、

「皆さん、大變な事でしたネ。」と言つて、下から走

つて来たのはチョンでした。

「やア、チョンさん入らつしやい！ 御馳走ですよ。」と法性院が言ひますと、チョンはにこ〜笑ひ乍ら、

「皆さんに、珍らしいお方を御紹介致します。昨晚四國から一人の猿廻しが僕の家へ宿りました。その猿廻しのつれて来た、御互ひのお仲間です。」と申しました。

「さうですか、どこに居ます。」と言つて、皆な立ち上りますと、後の頓栗の樹の所へ、ひよつこり姿を現はしたのは、英國海軍大將と陸軍大將との大禮服を着て、胸に十字の勳章をかけた二疋の猿でした。

「僕はネルソンと申します。」

二疋はさう言つて、擧手の敬禮をしました。百五十疋の猿共も皆な起立して、この珍らしいお客様に敬意を表しました。

その時、青蓮院は町の方を指さして、

「皆さん御覽なさい。あの町の家は皆な焼けてしまひましたが、吒枳尼天様だけ、焼けずに残つてゐます。」と申しました。するとチョンは、

「本當にネ、矢張り吒枳尼天様は尊い神様と見え、ちつとも焼けずに残つてゐますネ。これからさき、町の人達は吒枳尼天様を、火災除の神様だと云つて、信仰する事でせうネ。」

と、言ひました。

それと聞いたクロンウエルは、叱るやうな聲で、
「そんな事はありません。本當の神様であつたら、自分の社だけ焼けて、人民の家を焼けないやうに守つて下さいませ。人民の家は焼けてしまつてもいいが、自分の社だけは焼かないといふやうな利己主義な神様は、本當の神様ではありません！」と申しました。

ネルソンは皆の前に進み出て、

「皆さん、人間は家を焼かれて、食物が無くつて困つてゐませうから、この御馳走は村や町へ擔いで行つて、食物のない人達に頒けてあげようぢやありませんか。」

と、申しました。

「さうです、それはいい考へです。さア、救護班になりたい者は右の手をあげなさい。」

法性院がさう云ひますと、百六十疋は皆な右の手をあげました。

「ではネルソン大將、あなたは救護班長になつて下さい。」

と青蓮院が申しますと、クロンウエルは、
「それでは、僕は戒嚴司令官になります。」と申しました。

山の上は俄かに大騒ぎになりました。

|| おしまひ ||

金の星の合本

水島爾保布先生装幀

眞赤な総クロスへ、美しい箔金置いた、目もさめるばりに美しい水島先生獨特の装幀です。

- 第一輯(第四巻第七號より)(賣切)
- 第二輯(第五巻第十二號まで)(賣切)
- 第二輯(第五巻第一號より)

▽定価 壹圓八拾錢
▽送料金 十 四錢

出版部より

○本社出版部は残念ながら大震災のために全焼してしまひましたので、その後本社に合併いたしましたから、御注文その他お問合せは全部本社宛にお願ひいたします。

○『童話十講』『父戀し』其他の名著の紙型も焼かれてしまひましたが、これ等はいづれも新に組直して近日中に發行いたします。尙『童話十講』は二冊情童話作法講義一數十頁を添へて修訂の上、發行いたします事となりました。(但し、定価は従前通り)

○『父戀し』『赤い猫』は共に取敢へず大至急にこしらへましたから、御注文に應じられませう。御入用の方は要切れませぬ内大至急にお願いします。



信 通

誌友へ急告!!

▼この度の大震災で、東京横濱地方にお住ひの誌友の方々の中には、御住所の變つた方が澤山におありの事と存じます。その方々は、この際至急に本社宛に新御住所をお知らせ願ひます。

▼振替口座は當分の間、開始になる模様がございますから、こゝ暫くの間誌友費お拂込みは御面倒ながら振替口座を用ひず、爲替なり或は郵便切手なりで御送金を願ひます。但し切手の場合は壹錢切手で願ひます。(此の場合に限り一刻留の必要はございません)

▼震災の数日前に振替口座へ誌友費お拂込みの方は、社の方へ拂込通知が夢つてなりませぬから、その方は御面倒ながら振替口座受取書をお送り下さい。

▼誌友の研究雑誌『小馬』は、不幸にして印刷工場が全焼いたしましたので、止むなく工場

の復舊まで當分の間休刊いたします。いづれ印刷工場の恢復を待つて、續いて發行いたします。

愛讀者の方々へ!!

未曾有の關東の大震災に際し、皆様から御丁寧なお見舞いをいたして有難うございました。一々お禮を申上げる筈でございましたが、混雑の際でありましたので、手廻り兼ね失禮を重ねたことと存じます。どうぞおゆるしなれがひます。

出版部の方は上野公園前にありましたが、不幸にして全焼いたしました。本社の方は無事でございます。社員中にも一人の負傷者もなく、皆大元氣に活動いたしてありますから、どうぞ御安心下さいませ。

出版部はこの際本社に合併いたしました。今後はます、少年少女の讀物のために献身的努力をつとめさせていただきます。そして、もう既に著々計畫を進めてございまして、本年中には五六冊の新刊を發行いたす準備をいたしてあります。

尙、『金の星』もこの震災を機として、いよいよ新計畫の實行をいたすべく努力いたしてありますが、十二月號は雜誌協會の決議により全部休刊いたし、十二月のはじめに新年號を發行いたすことになりましたから、どうぞ右の次第を御承知がひます。

(附記)こゝ當分の間、金の星社宛の御送金

編輯室より

はすべて誌友の場合と同様、爲替が郵便切手かにお願ひいたします。

▼やうやく落つて仕事が出来ぬやうになりました。大震災當時はこの先きどうなつてしまふのかといふ不安があつて、いかに力んで見てもゆつくり仕事をやる気になれませんでした。この頃は毎日毎日が照つてをります。こんなに種々な日は、あのおそろしい大震災の後に來ようとは、誰か思ふことが出来ませう。

▼震災のおかげで何もかも手廻ひになりました。『金の星』の編輯方針にも大まごつきが十月になつて出で、十一月發行の十二月號は雑誌界全部が休刊して、これまで通り新年號を出さうといふのですから全くまごつきには、十月號は百八十頁の大雑誌で特別號『アラビヤン・ナイト』を出す計畫ですつかり準備をしたとの(校了にまでした)のでから閉口しました。それが印刷所の都合で普通號として出さなければならなくなつたので、特別號の原稿が澤山にあまつてしまつたのです。ところが持つて来て、本年中におしまひにしなければならぬ續き物の長篇童話が澤山にありま

金の星誌友募集

『金の星』の誌友を募集いたします。誌友にはいろいろの特典がございますから、本社宛に誌友規則書をお申込み下さい。早速お送りいたします。

申込み下さいませ。

○本居居世先生作曲の金の星童話曲譜集は、第一、第二、第三輯とも焼いてしまひましたので、只今は一部も手許にありませんが、いづれ再製に着手いたします。

○沖野先生の童話讀本の第二輯『金の釣瓶』はこれも、もう少しで製本といふ處で焼かれてしまひましたので、それを作り直してまいります。

○本年中に出版の豫定書は、三宅房子先生の『家なき子』とその他新叢書物四五種あります。出版部も本年はいふく多忙を極めることとさせていただきます。

金の星新誌友名簿

- | | |
|------------|------------|
| 白鳥 俊子様(千葉) | 山形學友會様(山形) |
| 中野喜代治様(埼玉) | 今宮 夢一様(東京) |
| 井上 廣治様(廣島) | 赤木 東三様(兵庫) |
| 山川 良子様(青森) | 小山 操六様(東京) |
| 堀 八 郎様(大阪) | 恩田 熊子様(岡山) |
| 花田 初子様(東京) | 中村 晶信様(長野) |
| 古村 春江様(東京) | 阿子島敬介様(香川) |
| 坂本 眞一様(石川) | 森田 三雄様(大阪) |
| 藤田 保雄様(愛媛) | 秋山 影國様(東京) |
| 藤田 民雄様(長野) | 齋藤 幸子様(京都) |
| 五味 國子様(秋田) | 野田 政一様(愛知) |
| 北村 利一様(福岡) | 神川 春雄様(三重) |
| 佐川 信治様(朝鮮) | 中山 忠福様(宮城) |
| 川合 良子様(北畠) | 今春 綾子様(大阪) |
| 柳原 幸二様(静岡) | (以下 次 號) |



讀者だより

先生、また號外が一日の晩、十二時半頃に来ましたが別に田端の事が書いてみませんか安心しました、今朝の八時頃にまた號外がきました。九時半にもまたきました。すると大火田端にも及ぶとの事です。先生早くおにげ下さい。早く／＼お氣をつけて。大阪市東區東雲町 さかのじゆん）

方から御見舞申上げなければならぬのが、あべこべになつて申しわけがありませんでした。それから賞品を戴きまして、有難う存じます。思へば九月一日の地震は恐ろしいものでした。ほんたうに恐ろしい時は聲も出ませんでした。恐ろしいと言つて聲の出る内は恐ろしいに抑るみがあると思ひました。ですから嬉しい事、悲しい事も恐ろしい事も頂上に達したら聲なんか出ないと思ひます。記者様もさぞ聲の出ない位に驚かれた事だらうと御察し致します。御社の御損害も大變だらうと思ひます。が早速本を發行されるさうです。不幸中の幸として僕等御祝ひ申上げます。神奈川縣川崎町 村上清夫）

も此大變災に數多の愛讀者諸友を失はれた事と思ひます。金の星は俗事にかまはらず文藝に益々輝きお上げ下さい。小石川 漢一調）

引き立ちました。このやうな事は都會で味ふ事の出来ないものです。千葉竹岡にて 新井青一）

▼此の大震災に御社もさだめし大損害の事です。諸先生にはお慶り有りませんでしたか。私のお家は奇蹟といはうか幸運かあの大火に焼けて残りました。不思議なくも残りました。田端方面は大した事もないさうですが心配でなりません。亂筆ながら震災御見舞まで。淺草區向柳原町 寺島貞次郎）

地震と一緒に火が出て見て居る間に焼けてしまひました。何分にも火が早いし地震で家の中がめまらめちやになつて居たものですから、ふんとその外の物をすこしばかり出したばかりで、外の物は皆焼けてしまひました。私の物は皆焼けてもなかつたけれど、金の星の二年分と自分で買った少しばかりの本をやいてしまった事が残念でなりません。今私は上臺幼稚園の校舎に避難して居ます。もう横濱に居てもしかたがありませんから、大阪か尾道へ行くつもりです。向ふへついたら又御手紙をさし上ます。横濱市上臺幼稚園内 田島英二）

しい／＼。人々の話に田端はひどくもならないといふ話でした。之を聞いて早速手紙を出した。次第です。金の星の十月號は今度出せまうか？ 心配してゐます。僕が金の星のそのものに非常に満足しました。直接の誌友ではありませんけれど、間接の誌友ならば六人程（へました。まだ、愛讀者を拵へていと思ひまして、小さな貧窮な本ですけれど僕等で拵へてゐる「夢の恋」に廣告してみました。無論無料なんですけれど、これでも少し位の効果はあるだらうと思ひます。貴社に無断で廣告した事は何卒御赦して下さい。そんな貧窮なものに廣告しては貴社の顔にかまはると御思ひかは知りませんが、其の所は何卒寛大な心をもつて御許しを願ふます。併し僕の盡力振りを何卒御認め下さいませ。僕も貴社の発展を祈ります。先生らも僕らの方の発展を祈つて下さい。先生方なほじめ給仕君らに變り無い様にと祈つておます。石川縣大聖寺町 竹本一男）

▼記者さま御手紙有難うございませ。私の家では皆無事でしたから御安心下さいませ。是からもなほ／＼愛讀致します又投書します。下赤羽町 稻垣よし子）

▼私共兄弟は、一月ばかり海へ行ってしまひました。海と言つても離れ小島、知多半島と福美半島に抱かれた内海にしがにねむる佐尾富子子）

著名大ニの生先郎三岩野沖

▽沖野先生のお話は、面白くつて、思はずクス／＼笑出してすみます。そして又どのお話も、独特の深い教訓を持つたものばかりです。

▽「赤い猫」は沖野先生のお母さん、この本を安心して読んで下さるでせう。『赤い猫』は日本ではじめての外国の小学校の讀本は、皆なよい童話を集めたもので、發行になりました。

赤い猫

童話讀本第一編 (模範課外讀物)

△定價金 九十錢
△送料 十二錢

少年少女名作物語第一篇

△送料 十二錢

父戀し

▽大震災後のさびし出版界に、少年少女の方々を慰めたく、急いで版を重ねて發行いたしました。この本は沖野岩三郎先生の名作として、出版界になりひびいた著書です。

▽お父さんを探ね歩く姉と弟のあはれな物語りですが、この本をお讀みになつた方は、このお話の中の姉と弟の立派な心と行ひに感心なさるでせう。

▽お父さんやお母さんをなくしたあはれな少年や少女が澤山に出來たこの時に、涙ぐましいまでに尊い此の物語りを、是非一度、お讀みになることをおすすしめします。

東京 東端 市 外 一 五 三 番 星の金 社 振替 東京 五九 五九 六番 小石川 三五 七八 番 電話

懸賞創作募集

◆少年少女の創作◆
自由畫……………山 本 鼎 先生選
幼年詩……………若 山 牧 水 先生選
綴 方……………編 輯 部 選

〔注〕 懸賞は何でもかまいません。諸君の日々見たり感じたり、したことが、諸君のすきなものを、諸君のすきなやうに畫なり、詩なり、文なりにしてかいてください。一人で何題出してもかまいませんが、姓名は學校や學年(または住所と年齢)ともにおとさないやうにして下さい。用紙は自由畫はなるだけ畫用紙に、幼年詩や綴方はなるだけ原稿用紙(または半紙)に書いてください。よく出來た方には、「金の星」特製の賞品を差上げます。次號(切は十一月廿八日)の以後は次號(廻る)發表は二月號、宛名は東京市外田端三百五十一番地金の星社。

◆一般讀者の創作◆

童 話……………野 口 雨 情 先生選
童 話……………齋 藤 佐 次 郎 先生選

〔注〕 童話は十五行以内、童話は二十字詰二百行以内、優秀な作品は推薦しまたは「特選」として發表いたします。推薦の場合は童話には五圓、童話には二圓づつ、特選の場合は童話には拾圓、童話には五圓づつ賞金として呈します。但し少年少女の創作童話にして、「入選」の場合は「金の星」賞を呈します。締切、發表、宛名は少年少女の創作と同じです。原稿には必ず住所姓名を記して下さい。原稿はお返しいたしません。

一〇六

定價壹冊 參拾錢 送料 壹錢
三ヶ月分三冊 (送料共) 九拾錢
半年分六冊 (送料共) 壹圓八拾錢
一年分十二冊 (送料共) 參圓六十錢
但し四月號、九月號、新年號は特別號で四十錢です。御註文の際は、この分だけ必ず加へてお拂込み下さい。
振替口座東京五九五六番

〔送〕 御註文は必ず前金で御拂込み下さい。
〔金〕 送金は、替が一番便利で御座います。
〔切手代用〕 (零錢切手) 一割増しです。
〔注〕 何巻第何號よりと書いてください。
〔意〕 住所姓名は必ず書き添えてください。
廣告料は御照會次第お答へ致します。

大正十三年十一月三日印刷納本(毎月一回)
大正十三年十一月五日發行(二日發行)

編輯兼發行人 齋藤佐次郎
東京市小石川久野町百八番地
印刷所 大橋光吉
東京市小石川久野町百八番地
印刷所 株式會社博文館印刷所
東京市外田端三百五十一番地
發行所 金の星社
振替口座東京五九五六番
電話小石川五三七八七番

お月さまのやうな
すやしい味の

ライオンねりはみがきで

歯をみがいて、いい心持でねむりませう。



『金の星』第五卷第拾壹號 (大正十一年六月十三日) 大正十二年十月六日刊 明 本 (定價金三十錢 送料一錢)